

ISBN 978-4-903875-23-1

Contribution to the Studies of Eurasian Languages (CSEL) Series 20

ユーラシア諸言語の多様性と動態－20 号記念号－

ユーラシア言語研究コンソーシアム 2018 年 3 月発行

Diversity and Dynamics of Eurasian Languages: The 20th Commemorative Volume

The Consortium for the Studies of Eurasian Languages

現代アルメニア語はどのような言語か

－その地域的特徴－

Some areal features of Modern Eastern and Western Armenian

岸田泰浩

KISHIDA, Yasuhiro

現代アルメニア語はどのような言語か —その地域的特徴—

岸田 泰浩

【キーワード】 東アルメニア語, 西アルメニア語, 地域言語学, evidentiality

1. 現代アルメニア語の地域的特徴

現在のアルメニア共和国は、グルジア、アゼルバイジャン、イラン、トルコに囲まれた内陸の小国である。しかし、古代のアルメニアはその版図を東はカスピ海、西は地中海まで広げたこともある、アナトリア東部の大国であった。現在の離散アルメニア語話者の分布にもその名残を見ることができる。

メスロプ・マシュトツ (Mesrop Mašt^(c)oc', c.362-440) によってアルメニア文字が創作されたのは五世紀初頭だと考えられている。そのときから古典アルメニア語 (Classical Armenian, *grabar* "written language") が長きにわたり規範的文語として君臨してきたが、19 世紀になって当時の大衆語をもとにした現代語 (*ašxarhabar* "worldly language") が古典語に代わる規範語として形成される。その現代語には二種の文語が存在する。コーカサスに近いアララット方言を基盤とする東アルメニア語 (Eastern Armenian, *arevelahayeren*) は、アルメニア共和国の公用語であり、グルジア、アゼルバイジャン、イラン等にも話者がいる。一方、アナトリア方言から発した西アルメニア語 (Western Armenian, *arewmtahayerēn*) は、トルコ、シリア、レバノン等の周辺地域だけでなく、欧米等、世界各地に離散したアルメニア人達の間で使われている^{*1}。

本稿では、現代アルメニア語がどのような言語的特徴を有しているのか、また、東アルメニア語と西アルメニア語がどのように異なるのかについて、その地域的特徴に注目しながら考察する。

1.1. 文字

メスロプ・マシュトツは、当時のアルメニア語が持つ音 (音素) に合わせて、子音 30 字と母音 6 字から成る独自のアルメニア文字を考案した。それは何世

*1 Dum-Tragu(2002)によると、共和国からの移民によって欧米では東アルメニア語話者が増加傾向にある。

めている。そのため、多くのアルメニア文字は、音価と数価がギリシア文字と一致しない^{*2}。このようなアルメニア文字の排列方法に関連して、Gamkrelidze (1989)は次のように述べている：ギリシア文字排列の中に新たに補充した（対応音がない）文字を散りばめたことに加え、文字の呼称もギリシア風にしながらしたのは、アルメニアの独自性を出すためのものであり、これには自らのキリスト教文化とギリシア文化との依存関係を伏せようとする、当時の宗教的・政治的背景があったと考えられる。

文語（書き言葉）と口語（話し言葉）が時代とともに乖離していくのは、言語の史的変遷の常である。アルメニア語においても、11世紀頃から話し言葉の音声面で変化が際立ちはじめた。しかし、近代の大衆語から生まれた現代アルメニア語は、古典語の発音とのずれを存置したまま、伝統的書法を継承したため、ひとつの文字がいく通りにも読まれたり、同じ音が別々の文字で書き表されたりする事態を引き起こした。そこで、現代語の音と文字を双方向に対応させることを目的に、ソビエト連邦時代のアルメニア共和国で正書法の改革が実施された（1922年と1940年）。この正書法改革によって、アルメニア共和国の文語である東アルメニア語では、文字と音との間にあった複雑な対応関係は単純化された。しかし、その一方で、西アルメニア語は現在もおお伝統的な正書法を使い続けているため、これら二つの現代文語の間に表記上の差異が生じる結果となった^{*3}。

(2) 伝統的正書法と新正書法

	伝統的正書法 (西)	新正書法 (東)	
[hajerēn]	hayerēn հայերէն	hayeren հայերեն	"Armenian language"
[ts ^h avøk ^h]	c ^h awōk ^h ցաւօք	c ^h avok ^h ցավօք	"unfortunately"
[aramjan]	Aramean Արամեան	Aramyan Արամյան	"Aramian"<family name>
[hujs]	yoys յոյս	huys հույս	"hope"
[jot ^h (ə)]	eōt ^h ə եօթը	yot ^h յոթ	"seven"

*2 例えば、ギリシア文字 Α(α)の数価は1、十番目の Ι(ι)が10、次の Κ(κ)が20、19番目の Ρ(ρ)が100、次の Σ(σ)が200。グルジア文字でも、a=1, i=10, k=20, r=100, s=200となっている。しかし、アルメニア文字では、a=1, ž=10, i=20, k=60, č=100, m=200であり、28番目の r は1,000、続く s は2,000である。ギリシア文字では Π(π)=80で、アルメニア文字では p=800なので、一部の文字は数価がギリシア文字の10倍になるように排列したのかもしれない。

*3 東アルメニア語の正書法改革は、共和国内での出来事であり、共和国（旧ソ連邦）外で話されている東アルメニア語では伝統的正書法が使われる。

spasel [əspasel]⁵ "to wait"

c. アクセントは最終音節に置かれる

これらの特徴はトルコ語と極めて類似し⁶, a.と b.はアルタイ諸語の共有特徴として日本語の系統を論じる際にもよく引き合いに出されるものである。

コーカサス諸語との類似点としては, 三項対立の破裂音・破擦音の存在を挙げることができる。コーカサス系のグルジア語は, 破裂音・破擦音に有声・無声無気・無声有気の三種があるが, 東アルメニア語にも同じ区別がある。これらの音はすでに印欧祖語の時代に同様の対立があり, アルメニア語はそれを継承しているだけであって, 言語接触によって革新的に生じたものではないとする見方も可能だが, 同時に接触でそれが維持されたという面も否定できない (cf. Ajello 1997, Vaux 1998)。また, グルジア語の無声無気音はコーカサス系に特有の放出音 (ejective, 声門化音) であるが, 東アルメニア語にも同等の音声特徴を有する方言がある (cf. Comrie 1981, Dum-Tragut 2009, Kozintseva 1995)。ただし, これについても Gamkrelidze & Ivanov(1984)が主張するように, 印相祖語に声門化音を仮定する説が妥当であるなら, 接触の影響は革新ではなく維持のレベルに留まる。他方, チュルク系やイラン系の言語による影響の可能性に目を向けると, 西アルメニア語で破裂音・破擦音が有声と無声 (有気) の二項対立に収束している点が際立つ。

(5) 破裂音・破擦音の対立 (cf. Vaux 1998, Gamkrelidze & Ivanov 1984)

T	D	T ^h	東アルメニア語 (及び古典アルメニア語)
D	T ^h	T ^h	西アルメニア語
*D	*D ^h	*T	印欧祖語 [語頭において]
*T'	*D ^(h)	*T ^(h)	(印欧語声門化説)

※ T : 無声音, T^h : 無声有気音, D : 有声音, T' : 声門化音

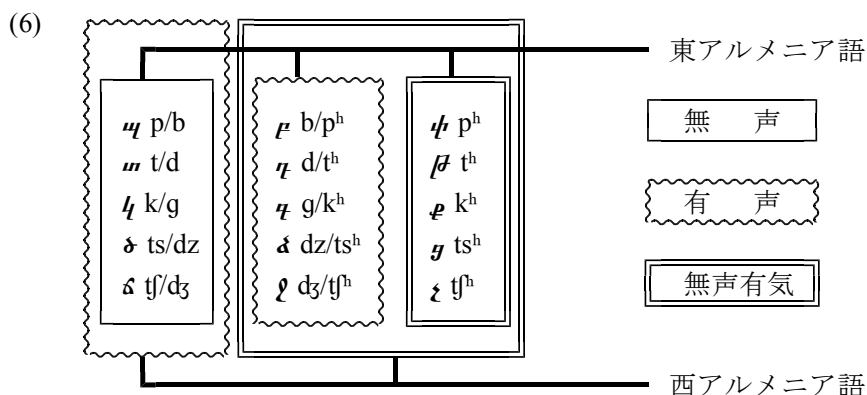
東アルメニア語が古典アルメニア語と同じ三項対立を維持しているのに対し, アナトリア方言にもとづく西アルメニア語が二項対立になっていることについてチュルク語等の影響を想像するのは難しくない。

破裂音・破擦音の体系が東と西の現代アルメニア語で異なっていることは, 両者の文字にも大きな相違をもたらしている。かつて三系列あった破裂音・破擦音が二系列に減じた西アルメニア語では, 無声音を記す文字が二つずつ存在する事態となった。さらに, 西アルメニア語では, その史的変遷の中で一部の子音において無声音と有声音が“逆転”したため, 例えば, 古典アルメニア語

*5 東アルメニア語では, 通常, 語頭の[a]を発音しない。

*6 アルメニア語の/r/は語末で無声化し, [ʀ]のように発音される。この点もトルコ語に似ている。cf. Vaux(1998)

と東アルメニア語で無声音を表す文字が、西アルメニア語では有声で発音される（図(6)で示した発音は、/の左が東、右が西）。



(7)

կան	դան	քան
<kan>	<gan>	<k'an>
(東) [kan]	[gan]	≠ [kʰan]
(西) [gan]	[kʰan]	= [kʰan]
"there are"	"they come"	"than"

この発音の逆転は、アルメニア系（移民）の名前のラテン文字表記にもその反映を見ることができる。典型的なアルメニア人の姓は、[-jan]という語尾をもち、ラテン文字では-ian や-yan と表記される。多くは、名(first name)がこの語尾と組み合わせさせてできたものである。例えば、Petrosyan や Petros(s)ian とラテン文字表記されるアルメニア系（移民）の姓は、Petros という名に基づいており、ちょうど北欧系において Peter という名から Peterson という姓が派生するのと類似する。この Petros(s)ian というアルメニア系の姓には、Bedros(s)ian という別のラテン文字表記がある。アルメニア文字だとほぼ同じ綴り^{*7}であるのだが、無声破裂音で記された Petros(s)ian は東アルメニア系で、有声破裂音で記された Bedros(s)ian は西アルメニア系である。同様に、Hakobian/Hagopian, Grigoryan/ Krikorian, Poghosian/Boghossian, Davtyan/Tavitian 等からも、東西のアルメニア系の違いを読み取ることができる^{*8}。

*7 語尾[-jan]の部分は、新正書法（東）では発音通りに-յան<yan>と綴られるが、旧正書法（西）では伝統的な綴り-եան<ean>を用いる。先の(2)を参照。

*8 Hakobian/Hagopian は、"Jacob"に相当する名から。語頭の[j]は、現代語で[h]に変化した（西・伝統的書法では、文字<y>で綴る。同じように Hovhannisyan は "John"に相当する名から）。語頭の H が脱落した Akobian や Agopian 等の表記もある。Grigoryan/Krikorian は "Gregory", Poghos/Boghos は "Paul", Davtyan/Tavitian は "David"に相当する名から。

1.3. 形態・統語

現代のアルメニア語は、形態面では全体的に膠着的様相が強い。ほとんどの名詞がその複数を接尾辞-er(単音節語)/-ner(複音節語)によって形成し、同じ形の格接辞がそれに後続することや動詞の受動形が接辞-v-^{*9}によって生産的に造られることがそれを代表する。名詞は文法性を消失しており、動詞活用も分析的傾向が強く、「動詞非定形(分詞)＋助動詞」による形式が多用される。また、以下に例示した三系列ある(8)a.指示詞の核心的形態が(8)b.所有接尾辞としても機能する点もあわせ、チュルク系言語との接触による発展を想起させる。

- (8) a. **sa, da, na** 「これ, それ, あれ」, **ays, ayd, ayn** 「この, その, あの」等
 b. -s (近称, 1人称), -d (中称, 2人称), -n/-ə (遠称, 3人称) ^{*10}
tun_s "my house", **tun_d** "your house", **tun_a** "his/her house"

特に名詞が人称代名詞の属格形を伴う場合、東西アルメニア語で以下のような相違が観察される。(アルメニア文字の転字は、Hübschmann-Meillet 方式を用いる。本稿末の補遺を参照。従って、**տուն**<tun>"house"は西アルメニア語で[dun]と発音されるが、転字は東アルメニア語[tun]と同じく tun と記す。)

(9)	東アルメニア語	西アルメニア語	トルコ語
一人称所有	im tun _s	im tun _s	benim evim
二人称所有	k'o tun _s	k'u tun _d	senin evin
三人称所有	nra/ir tun _a	anor/ir tun _a	onun evi

アルメニア語で、im は一人称代名詞の、k'o/k'u は二人称代名詞の、nra/anor は三人称代名詞の、そして、ir は再帰的(/強意)三人称代名詞の、単数属格形である。東アルメニア語では、代名詞の属格形を伴う場合、名詞は常に遠称の接尾辞-n/-ə を用いるのが規範である。一方、西アルメニア語でも、遠称の接尾辞を用いるのが規範であるとされているが、(特に口語では) (9)に記したように、人称代名詞と呼応した接尾辞が付くのが一般的である^{*11}。トルコ語でも代名詞属格形と同じ人称の所有接尾辞が被修飾名詞に付き、西アルメニア語の一致パターンはトルコ語と並行的である。

^{*9} 西アルメニア語では、**ու**<u>(=<ow>)と表記されるが、音は[v]で実現する。(3)を参照。

^{*10} -s と-d の発音は各々 [(ə)s] と [(ə)t] である (子音で終わる語では [ə] が挿入される)。遠称・三人称では母音で終わる語には -n, 子音で終わる語には -ə が付く。ただし、後続の語が母音始まりで、連結して発音される場合は、子音終わりの語でも -n となる。(古典語では、常に -n [(ə)n] であった。)

^{*11} Minassian(1980)は、東アルメニア語において、人称が呼応した形式は方言であると述べている。アルメニア語は方言が多い。東西の現代文語は“分離”していても、どの言語でもそうであるように、実際に話されるアルメニア語の諸方言は“連続的”である。

また、英語の *mine* 等に相当する所有代名詞（人称代名詞属格形が名詞化したもの）についても、東西アルメニア語で同様の差異が見られる。

- (10) 東 : *imə* "mine", *k'onə* "yours (sg.)", *irenə/nranə* "his, hers, its"
 cf. *merə* "ours", *jerə* "yours (pl.)", *irenc'ə/nranc'ə* "theirs"
 西 : *im(in)s* "mine", *k'uk(in)d* "yours (sg.)", *ir(enin)ə/anor(in)ə* "his, hers, its"
 cf. *mer(in)ə* "ours", *jer(in)ə* "yours (pl.)", *irenc'(in)ə/anonc'(in)ə* "theirs"

西アルメニア語では、所有代名詞が単数の場合、同じ人称の所有接尾辞を伴うが、東アルメニア語では、一貫して接尾辞 *-n/-ə* が接続する^{*12}。さらに、被所有物が複数あることを示したい場合、西アルメニア語では(10)に複数接辞 *-ner* を付加するだけでよいが、東アルメニア語では意味的に該当するものとして全く別の形式（接辞）を用いなければならないのは、以下に見るとおりである (cf. Avetisyan 2008, Bardakjian & Vaux 1999, Gevorkian 2000, Sakayan 2007)。

- (11) 西 : *iminners* "(those of) mine", *k'ukinnerd* "(those of) yours (sg.)",
 iren(in)nerə/anor(in)nerə "(those of) his, hers, its"
 merinnerə "(those of) ours", *jerinnerə* "(those of) yours (pl.)",
 irenc'(in)ner ə/anonc'(in)nerə "(those of) theirs"
 東 : *imonk'* "(those of) mine", *k'ononk'* "(those of) yours",
 meronk' "(those of) ours", *jeronk'* "(those of) yours"

Bardakjian & Vaux(1999)は、三人称について西アルメニア語と同形の *irennerə* "(those of) his, hers, its" と *irenc'nerə* "(those of) theirs" を挙げているが、同じ三人称でも *sranə/dranə* (複数 *sranc'ə/dranc'ə*) には被所有物が複数あることを示す形がなく、また、*meronk'* と *jeronk'* は、その意味として親族等の親しい関係にある集団も指し示すと述べている。Sakayan(2007)は、東アルメニアの口語でよく使われる表現として、一人称複数の *meronk'* と二人称複数の *jeronk'* のみを挙げ、それぞれ "(those that are) mine or ours (my/our folks)" と "(those that are) yours (your folks - formal and plural)" という訳を付している。Gevorkian(2000)は、*meronk'* と *jeronk'* について、各々 "my family or friends" と "your family or friends" というもう一つの意味があると述べ、また Avetisyan(2008)も当該の二語について "people (specially family) related to speaker or listener without them and without mentioning related peoples names" を表すと解説している。興味深いことに、例えば、*meronk'* が一人称複数の代名詞から派生しているにも関わらず、その訳には単数の "my" があてられている。

*12 ただし、東アルメニア語を扱った Bardakjian & Vaux(1999)は、遠称接尾辞を伴う形式に加え、人称が一致した形式も挙げている。Sakayan(2007)でも *imə* に加え、西アルメニア語と同じ *ims* が "second option" として挙げられている。

- (12) Meronk' tanə č'en. "My family are not at home." (Gevorkian 2000)
ours home-DAT-DEF NEG-are.3PL

また、これらの表現に現れる接尾辞-onk' は、Sat'onk' "the Sat's family"のように人称代名詞以外にも付き、親族等を表す語を派生させる^{*13}。

(10)と(11)における東西アルメニア語の形式や意味を見比べると、西アルメニア語では包括的かつ膠着的に形が作られているのに対し、東アルメニア語では、両者に形式上の一体感が見られない。トルコ語でも benimki "(that of) mine" に複数接辞-ler を付ければ、複数の被所有物を示す benimkiler "(those of) mine" 等の形が出来上がる (cf. Lewis 2000²) ことを考えると、西アルメニア語のほうが、(9)のように代名詞属格と名詞に付加する接辞の人称が一致することとも合わせ、形態構成上もパラダイムのにもトルコ語に近い。

人称接辞は、古典アルメニア語においては、指示詞として独立した機能を強く持っていたようで、例えば、以下のように人称代名詞属格形と呼応していない接辞を持つ例がある (Jensen 1959)。

- (13) a. k'oyrd im "meine (im) Schwester (-d = da neben dir)"
b. zcarəys k'o "deinen (k'o) Deinst (-s = hier)"

その後、西アルメニア語において人称が呼応した形式がチュルク語の影響で多用されるようになったのではないだろうか。一方、東アルメニア語（や規範的な西アルメニア語）において、人称に関わらず、遠称の接尾辞がなぜ用いられるかであるが、それは、この接尾辞が遠称や三人称ではなく、単に定性を示しているからである。すなわち、当該の接尾辞は「定冠詞」と同じ機能を有しており、バルカン地域に見られる「後置定冠詞」と同類のものである。

接触によって言語特徴を共有するに至った例としてバルカン地域の言語連合が名高い (cf. Tomić 2004, 2006)。アルメニア語では後置定冠詞の他にもバルカンの特徴が観察される。それについて詳述する前に、まずは東西アルメニア語の名詞曲用の概要を見ておきたい。(14)a.は接尾辞による規則的曲用でもっとも一般的なタイプ（属格形-i）で、b.は語中の母音が変化するタイプ（u → a）である。(14)c.には代名詞の例を挙げた。（東西で形が異なる場合は、/の左に東、右に西の形を記す。）

*13 cf. Zorc & Baghdasarian(1995)；他にも pap-onk' "grandfather's side"等。同類の接辞としては Tigran-enk' "the Tigran family"等もある。接辞-onk' は、疑問代名詞/関係代名詞 or "which" の主格複数形 or-onk' にも現れる。この or-onk' は、西アルメニア語でも使用され、また、ov "who"の複数形としても用いられる（東アルメニア語 ov の複数形は ovk'er）。西アルメニア語では他に as-onk' "these"のような指示代名詞も当該の接辞で主格複数形を形成する（東アルメニア語の対応形は srank'）。

(14) a. "student"

	単数形	複数形
主格	usanoł(ə)	usanoł-ner(ə)
属格	usanoł-i / usanoł-i(n)	usanoł-ner-i / usanoł-ner-u(n)
与格	usanoł-i(n)	usanoł-ner-i(n) / usanoł-ner-u(n)
対格	usanoł-i(n) / usanoł(ə)	usanoł-ner-i(n) / usanoł-ner(ə)
奪格	usanoł-ic' / usanoł-ē(n)	usanoł-ner-ic' / usanoł-ner-ē(n)
具格	usanoł-ov	usanoł-ner-ov
処格	— / —	— / —

b. "house"

	単数形	古典語	複数形	古典語
主格	tun(ə)	tun ^{*14}	tn-er(ə) / tun-er(ə)	tunk'
属格	tan / tan(ə)	tan	tn-er-i / tun-er-u(n)	tanc'
与格	tan(ə)	tan	tn-er-i(n) / tun-er-u(n)	tanc'
対格	tun(ə)	tun	tn-er(ə) / tun-er(ə)	tuns
奪格	t(a)n-ic' / tun-ē(n)	tanē	tn-er-ic' / tun-er-ē(n)	tanc'
具格	tn-ov ^{*15} / tun-ov	tamb	tn-er-ov / tun-er-ov	tambk'
処格	tn-um ^{*16} / —	tan	tn-er-um / —	tuns

c. <代名詞>

	"I" (人称代名詞)	"who" (疑問代名詞)	"this" (指示代名詞)
主格	es	ov	sa / as
属格	im	um / oru(n)	sra / asor
与格	inj / inji	um / oru(n)	srā / asor
対格	inj / zis ^{*17}	um / (z)ov	sa, srā / as
奪格	inj(a)n-ic' / injm-ē	um-ic' / orm-ē(n)	srā-ic' / ask-ē
具格	inj(a)n-ov / injm-ov	um-ov / or(m)-ov	srā-ov / as-ov
処格	inj(a)n-um / —	— ^{*18} / —	srā-um / —

まず、東アルメニア語と西アルメニア語の名詞曲用における基本的な相違点は、(i)西には処格がない、(ii)奪格は、東が-ic'(/-uc')で西が-ēである、(iii)普通名詞の複数形における属格・与格は、東では-iで西では-uである、ことである。対格については次のような違いがある：東において人物名詞（a.の例）は与格と同形、非人物名詞（b.の例）は主格と同形であるが、一方、西においては、

*14 正確には、town。1.1.節および本稿末の補遺を参照。

*15 一部の単数斜格形、および、複数形では語中の母音が弱化して[ə]となる。正書法では、そのような弱化母音は表記されない。cf. (4)b.

*16 通常、「家で（在宅）」と言う時は、tanə が用いられる。

*17 西アルメニア語に見られる語頭の z-は古典アルメニア語の(定の)対格標識の名残である。疑問代名詞 ov の対格(z)ov にも現れるが、口語では z-を伴う形は一般的ではない。また、指示代名詞にも、対格であることを明示的に示す zays という形式がある。

*18 処格形がない名詞では、～(属格)+ mej "in"で代用される：um mej。

(古典語の単数形曲用と同じく,)いずれの種類の名詞でも主格と同形である^{*19}。ただし、東アルメニア語で「人物性」という特性は固定的ではない。人物名詞でもそれが不定の概念である場合は、主格形が使われる。また、口語では、人物だけでなく(特定の指示 *specific* の)動物に言及する場合も目的語が与格で表示されるようになってきていると Dum-Tragut(2009)は指摘している。この点で東アルメニア語はロシア語等と同じような「活動体」と「非活動体」の対立に近づいていると言えるだろう(cf. Minassian 1980)。一方, Samuelian(1989b), Hagopian(2005), Dum-Tragut(2002)等は, 西アルメニア語(の口語)でも有生物の直接目的語が与格で標示されることがあると指摘している^{*20}。

語末の括弧内の *ə* や *n* は遠称の指示詞に由来する後置定冠詞であるが, 東西の文語でその付き方が異なる。東アルメニア語では属格や奪格が後置定冠詞を伴うことがないのに対して, 西アルメニア語ではそれが可能である((14)を参照)。ちなみに, 現代アルメニア語には不定冠詞もある。西では *mə* を名詞に後置し, 東では *mi* を先行させる(いずれも独立した語として)^{*21}。しかし, 英語ほどその使用は汎用的でなく, 不定であるが特定の指示であることを表す。

先に触れたように, 後置定冠詞の他にもアルメニア語はバルカンの特徴を備えている。

- (15) a. 後置定冠詞: *-ə/-n*
- b. 属格形と与格形の融合
- c. 比較級と最上級の分析的な形成

東西アルメニア語では, (一部の代名詞を除き) 属格と与格は同形になる。(14)a.のように接尾辞によって規則的に曲用するものも, b.のように幹母音の交替によって屈折的に変化するものもその点は変わらない。この二つの格が同じ形式に融合しているのもバルカン言語連合と共通する。ただし, 東アルメニア語では与格と異なり, 属格は後置定冠詞を許容しないため, 全く同一であるとは言えないかもしれない。

形容詞や副詞の比較級と最上級について, 前者は *aveli*(東)/*aweli*(西)を, 後者は *amenic*‘(東)/*amēnēn*(西)を前置して形成される^{*22}。最上級は, 接頭辞 *amena-*を

*19 (14)c.の指示代名詞の対格形も同じ原理による。

*20 与格支配の他動詞では, 有生性にかかわらず, 目的語が与格になる。

*21 どちらも古典アルメニア語の数詞 *mi*「1」に由来する。現代語の「1」は *mek*(東)/*mēk*(西)。古典語でも *mi* が名詞に後置された場合, 不定冠詞のような機能を担うことがあった(Dum-Tragut 2002, Jensen 1959, Meillet 1913 "*ein gewisser*", Minassian 1976 "*quelconque*", Schmitt 1981, 千種 2001)。

*22 比較の基準となる名詞「～より」が奪格で表現された場合, *aveli* は省略されることがある。最上級として使用される形式は, *amen/amēn* "*every, all*"の奪格形で(14)を参照), 「すべてのものより, どれよりも」を意味する。

用いる方法もあり、また、接尾辞-aguyn(東)/-agoyn(西)による派生形を有するものもある^{*23}。いずれにせよ、*good - better - best* のような（補加的）不規則はなく、その点でバルカン的である。

(16) lav/law "good"

- a. 比較級 aveli lav (西 aveli law) "better"
- b. 最上級 amenic' lav ~ amenalav ~ lavaguyn "best"
(西 amēnēn law ~ amenalaw ~ lawagoyn)

先の(14)に挙げた名詞の曲用に再び目を向けてみよう。(14)b.に併記した古典語の形と比べると、現代語の複数形の形成方法が膠着的になっていることが分かるだろう。また、東アルメニア語の処格接辞-um は古典語の所有代名詞や疑問代名詞等の処格形に由来し、奪格接辞について、東アルメニア語は古典語の複数奪格形を、そして、西アルメニア語は単数奪格形を、それぞれ継承するものである (cf. Samuelian 1989b, Hagopian 2005)。つまり、現代アルメニア語は、古典語で使用範囲が限定的であった形式（語尾）を一般化・汎用化し、規則的・膠着的な形態法を発達させた (cf. Sargsyan 1985)。現代語には、(14)a.に例示したような、属格・与格形を接尾辞-i によって形成する最も典型的なタイプ以外に、-u, -an, -va/-uan, -oj 等の接尾辞付加によるタイプ、語中の母音を -o/ö-に変えるタイプ、古典語から引き継いだ「不規則」タイプがある。それらの中には、本来の曲用タイプに基づく形に加え、（特に口語において）最も典型的な-i タイプでも格変化するものが少なくない (cf. Avetisyan 2007, Dum-Tragut 2009, Sakayan 2000,2007,2012, Sargsyan 1985 他)。

Sargsyan(1985)は、名詞の曲用形式について、東アルメニア語のほうが西アルメニア語よりも「伝統的」とであると指摘している。例えば、西アルメニア語では tun "house"の属格・与格として(14)b.に挙げた屈折的な tan(ə)の他に tun-i(n)という規則的な形もよく使われる^{*24}。さらに次の語例を見てみよう^{*25}。

*23 Hagopian(2007)によると、接尾辞による形は絶対最上級であり (cf. Venturini & Malherbe 2007)、日常的には使用されない。東アルメニア語でも同形は口語であり使用されず、また、全ての形容詞がこの形式を持つわけではない (cf. Avetisyan 2008, Dum-Tragut 2009, Gevorkian 2000)。

*24 東アルメニア語でも口語で tuni という形式が使われることがあると Minassian(1980)や Parnasyan & Manukyan(1990)が指摘している。

*25 続く議論の中で取り上げる語形（特に西アルメニア語）については、主に以下の文献を参考にした：Andonian(1999), Avetisyan(2007), Bardakjian & Thomson(1977), Der Merguerian(2012), Feydit(1969²), Hagopian(2005), Ilıcak & Goshgarian(2006), Margaryan(2000), Minassian(1980), Movsessian(1959), Sakayan(2000,2007,2012), Samuelian(1989ab), Sargsyan(1985)。

(17)	"name"	"spring"
主格	anun	garun
属格・与格	anvan / anun-i ~ anuan	garnan
奪格	anun-ic' / anun-ē	garnan-ic' / garun-ē
具格	anun-ov ~ anvamb / anun-ov	garnan-ov / garun-ov

名詞 *anun* "name"は、その属格・与格が多少変則的で、*anvan*(東)/*anuan*(西)^{*26}となる。東アルメニア語は、規則的な具格形 *anunov* の他、古典語由来の *anvamb* ((14)b.を参照) も残している^{*27}。一方、西アルメニア語では、生産的な-i 接辞によって作られた属格・与格形 *anuni* も Feydit(1969²)の時代にはすでに「幅をきかせつつ」あった。名詞 *garun* "spring"は、属格・与格が接尾辞-an によって形成されるタイプである。その奪格と具格の形について、東アルメニア語は属格・与格形 *garnan* をもとにしているのに対し^{*28}、西アルメニア語は主格形 *garun* をもとにしており、より透明性がある。

名詞 *mard* "human being, man"は、東でも西でも不規則な複数形 *mardik* を持ち、それは以下のように古典語風に格変化する。

(18)	<i>mard</i> の複数形 <i>mardik</i>
主格	<i>mardik</i> / <i>mardik</i> ~ <i>mard-er</i>
属格・与格	<i>mardk-anc'</i> / <i>mard-oc'</i> ~ <i>mard-er-u</i>
奪格	<i>mardk-anc'-ic'</i> / <i>mard-oc'm-ē</i> ~ <i>mard-er-ē</i>
具格	<i>mardk-anc'-ov</i> / <i>mard-oc'm-ov</i> ~ <i>mard-er-ov</i>

現代語では複数形扱いされる *mardik* は、古典語では集合名詞（単数形）であり、それ自体に複数形はなかった (Thomson 1989)。また、古典語では、*mard* に規則的な複数形 *mardk'*（主格）があり、こちらは、集合的な意味ではなく、個々の人に言及する場合に使われた (Meillet 1913, Schmitt 1981^{*29}, 千種 2001)。西アルメニア語の属格・与格形 *mardoc'* は、*mardik* ではなく、*mard* の古典語における複数（つまり、*mardk'* の）属格・与格形そのものである。東アルメニア語の属格・与格形 *mardkanc'* は *mardik* を古典語風に複数変化した場合の形である（古典語における *mardik* の単数属格・与格は *mardkan*）^{*30}。このような複雑な背景ゆえか、*mardik* は不規則かつ東西で異なる変化を示すが、注目したいのは、西アルメニア語には古典語由来の不規則形だけでなく、単数形 *mard* を生産的な接尾辞-er によって複数形にした *mard-er* とその規則的変化形

*26 東の *anvan* と西の *anuan* の表記の違いについては、(3)を参照。

*27 古典語 *anuamb* < **anuan-b*. (14)b. *tamb* < **tan-b*. cf. 千種(2001)

*28 Minassian(1980)は、西アルメニア語と同じ形式 *garunov* を具格形として挙げている。

*29 singulative Bedeutung „einzelne Menschen”

*30 Sakayan(2000,2012)は、西アルメニア語でも、属格・与格形として *mardoc'* に加え、東アルメニア語と同形の *mardkanc'* も挙げている。

も用いられる点である^{*31}。Alayan(1976), Haykakan SSH GA(1969-1980), Suk'iasyan & Suk'iasyan(2002)の辞書では、西アルメニア語に mard-er という複数形もあると明記されており^{*32}、この規則形が広く受け入れられていることが推測できる。Hagopian(2005)も、marder は西アルメニア語の標準語に受け入れられた新しい形であると述べている。同じように、名詞 kin "woman"も古典語譲りの不規則複数形 kanayk' を両現代語は持つが、西アルメニア語では規則的な kin-er という形がよく使用される (cf. Bardakjian & Thomson 1977, Sakayan 2000,2012, Samuelian 1989ab) ^{*33}。このように、西アルメニア語のほうが東アルメニア語よりも膠着的な様相を強く呈していることが窺える。

その一方で、東アルメニア語のほうが膠着的になっている語例もある。

(19) tla / tlay "boy, son, child"

	単数	複数
主格	tla / tlay	tla-ner / tla-k' ~ tla-ner ^{*34}
属格・与格	tlay-i / tl-u ~ tlay-i	tla-ner-i / tl-oc' ~ tla-ner-u
奪格	tlay-ic' / tlay-ē	tla-ner-ic' / tl-oc'm-ē ~ tla-ner-ē
具格	tlay-ov	tla-ner-ov / tl-oc'm-ov ~ tla-ner-ov

名詞 tla(y)の複数形は、東アルメニア語では規則的に形成される。一方、西アルメニア語では、古典語風の(現代語としては)不規則な変化形 tlak' や tlac' が存在するが^{*35}、それと同時に規則的な複数形 tlaner も使用される。さらに、tlak'ner (Bardakjian & Thomson 1977) や tlerk' (方言形; Samuelian 1989a) のような、複数形接辞が二重に付加しているようにみえる形式も西アルメニア語に存在する: -k' (古典語の複数主格)と-(n)er (現代語の複数)。Samuelian(1989a)が方言形とする tlerk' は、Alayan(1976)や Eggenstein-Harutunian(2011)にも、東アルメニア語の俗語として記載がある^{*36}。遡って Malxaseanc'(1944-45)を見ると、tlay の多様な語形変化が列挙されている^{*37}。

(20) 単数 tlayi, tlayov 複数 tlaner, tlaneri

*31 Samuelian(1989a)によると、古典的な形式のほうは、主に定型表現で用いられる。

*32 Malxaseanc'(1944-45)も marder を挙げている。ただ、通常は、mardik だと記している。

*33 Malxaseanc'(1944-45)を始め、Alayan(1976)や Haykakan SSH GA(1969-1980)には、kiner という形式について言及はない。

*34 複数接辞の前で y が脱落しているが、そもそも現代語で語末の y は発音されない。東アルメニア語では発音に合わせ、単数主格形でも y が表記されない。ただし、格接辞が付くと、y が発音とともに“復活”する。

*35 Feydit(1969²)は、属格・与格形として古典語由来の tlayoc' も挙げている。

*36 Haykakan SSH GA(1969-1980)にも、特に位相については言及されていないが、当該の形式が tlaner とともに挙げられている。cf. 吉村(2013)

*37 Malxaseanc'(1944-45)では、語尾のみが書かれた形もあるが、完全な語に改めた。

(21) 方言

- a. 単数 *tli*^{*38}, *tlic*′, *tlec*′ēn, *tlov*
- b. 複数 *tlayk*′, *tłak*′, *tlayoc*′, *tloc*′, *tloc*′mēn, *tloc*′mov
- c. 複数 *tłēk*′, *tlerk*′, *tleranc*′, *tleranc*′ic′, *tleranc*′ov

Malxaseanc′(1944-45)が挙げている語形(20)は、まさに東アルメニア語で使われているものである。西アルメニア語独自の形式は方言として掲載された語形(21)b.に含まれている。また、西アルメニア語の方言や東アルメニア語の俗語とされる *tlerk*′ ((21)c.) も記載されており、非標準的な形として広く使われていたと考えられる。古典語において *tlay* は o 語幹の名詞として規則的に変化した: *tlay-oy*; *tlay-k*′, *tlay-oc*′ (順に単数属格, 複数主格, 複数属格)。現代語にも見られる異形態 *tli/tlu* や *tloc*′ 等は、語幹が *tla(y)*-ではなく、*tl-*だと捉えられていることを示唆する。なぜそのような誤分析されたのかは定かでないが、例えば、次のようなことが原因として考えられるかもしれない。先に *kin* "woman" は古典語由来の複数主格形 *kanayk*′ を持つことに触れた。これ以外に *paron* "gentleman, Mr." と *tikin* "madam, Mrs."にもそれぞれ *paronayk*′ と *tiknayk*′ という同じ語尾を持つ複数形がある^{*39}。さらに、古典語では *alaxin* "maid" も *alaxnayk*′ がその複数主格形であった。これらの語の複数主格は「語幹(の異形態)-ayk′」という構造を有する。そして、意味的にも人物の種類を表すという点で仲間になるこれらの語からの類推によって、*tlay* "boy, son, child"の正統な古典語複数形 *tlayk*′ が *tlay-k*′ ではなく、*tl-ayk*′ と異分析され、*tl-*が語幹であると誤って解釈されたのではないだろうか。もしそうだとすると、問題の *tlerk*′ は、*tl-erk*′ のように分けられ、さらに分解すると、*tl-er-k*′ となるだろう。この語形は「語幹-複数-複数」と形態分析できそうにみえるが、はたしてそうだろうか。

通常、複数形に複数形を重ねるようなことは起こらない。そのようなことが起こるとすれば、所与の複数形が何らかの理由で複数形とは解釈されず、つまり、単数形だと誤解され、改めて複数形にするというような場合である。もし *tlerk*′ もそれが原因で生まれたとするなら、*tl-er* という本来、複数形であるものが、そうだと認知されなくなり、複数語尾-*k*′ が新たに付け足されたということになる。しかし、そのように考えるのが躊躇われる理由がある。まず、複数であるにせよ、単数であるにせよ、*tlér* という形が語として(かつて)存在していてもいいはずだが、Malxaseanc′(1944-45)の辞書等には記録がない。もうひとつの理由は、アルメニア語の新しい複数接辞-*er* の後に古典語の古い複数主格接辞-*k*′ が接続していることである。つまり、現代語の複数接辞をもつ *tlér*

*38 Haykakan SSH GA(1969-1980)には、属格形として *tli* も併記されている。

*39 規則的な複数形 *paronner* と *tikinner* もある。Bardakjian & Thomson(1977)と Bardakjian & Vaux(1999)によると、古典形の *tiknayk*′ はフォーマルな呼びかけで使われる。

が複数であるとは認識されなくなり、現代語で非生産的な古典語の接辞-k' をわざわざ用いて複数形であることを明確にしたという考えは説得力がない。もし改めて複数形にするなら、現代語の接辞を用いて、*tler-ner のようにするのが自然であろう。つまり、tlerk' は、二つの複数接辞-er と-k' が重ねられた結果であるとは考えにくい。

実は、古典語に複数主格形が-erk' で終わる曲用タイプがある。r 語幹の語がそれである。この r 語幹をもつ語の中には、dustr "daughter" と ustr "son" が含まれる。古典語における両者の複数主格はそれぞれ dst-er-k' と ust-er-k' で、tlerk' は表面的にそれらと全く同じ形をしている。先述したような理由で tlay "boy, son, child" の語幹が tl-であると異分析され、そして、意味的に同列の親族名称である dustr や ustr と曲用タイプも同じであると誤認識された結果、tl-er-k' なる語形が生じたのではないかと考えられる。この tlerk' は、西アルメニア語でも東アルメニア語でもその存在が認められ、Malxaseanc'(1944-45)にも挙げられていることから、それなりに古くから存在していたと思われる。古典アルメニア語の影響がまだ強い時代を背景にして生まれた語形であるなら、ここで示した推論にも妥当性がある。そうすると、tlerk' に対しては、「革新形」ではなく、「懐古形」や「擬古形」という呼び名が相応しい。つまり、両アルメニア語に存在する当該の形式は、接尾辞に別の接尾辞を連ねて膠着的に作られたのではなく、古典語の曲用を模倣して、いわば屈折的に作られたのだと言えよう。

一方、Bardakjian & Thomson(1977)が挙げている西アルメニア語の tla-k'ner という形は Malxaseanc'(1944-45)には見当たらない。この新しい形については、tla-k'-ner と形態分析すれば、tlerk' には当てはまらなないと主張した複数接辞の二重化、すなわち、tla-k' が古典的な形であるがゆえに、複数形であるということが不透明になったために^{*40}、規則的な接辞-ner を付けて改めて複数形にした革新形だとする考えが成り立つ。この tla-k'ner は、ある意味、形態と意味の一对一对応を唱う膠着性の趣旨に合った形だと見なすことができる。

西アルメニア語には重複した複数を内包した語が他にもある。名詞 cnoł "parent" も古典語由来の複数形 cnolk' を持つが、cnołner という現代的な語形も使われる。Bardakjian & Thomson(1977)は、前者は「両親」、後者は「親たち」という意味で使い分けがあると説明し^{*41}、後者の意味では cnolk'ner なる複数

*40 単数主格末尾の y が複数主格でも発音されなくなり、本来の古典語形 tlayk' が tla-k' になったことや、tlayk' の語中音[aj]が[e]に変化したと思われる tle-k' という形の存在も、不透明化を助長した可能性がある。(東アルメニア語の口語でも、aysor "today" が ēsor のように発音されることがある。cf. Tioyan et al. 2007)

*41 Alayan(1976), Eggenstein-Harutunian(2011), Haykakan SSH GA(1969-1980)も、cnolk' を cnoł の古い複数形であると説明している。また、Haykakan SSH GA(1969-1980)では「両親、父母」を意味するとも定義されている。

形もあると述べている。この *cnol-k'-ner* は, *tla-k'-ner* とまったく同じ構成を有する重複複数形である^{*42}。さらには, Movsessian(1959)は, 先に見た *mardik "men"* について, *mardik-ner* のような二重複複数形 (*die doppelte Pluralform*) が西アルメニア語で用いられると記している。

(19)に挙げた *tla(y)*の標準的な変化形だけを見ると, 東アルメニア語のほうが西アルメニア語よりも膠着的であるとの印象を受けるが, 当該の語が見せる口語形も含めた様々な異形態を詳しく観察すると, むしろ西アルメニア語のほうが膠着的で規則的に語を変化させようとしている様が浮かび上がる。西アルメニア語において, 古典語的な不規則形に加え, 現代的な規則形が多用されることや古い複数形に現代の複数接辞を重ねた形式が散見されることにこの言語が有する膠着性の強さの一端が見える。さらに, 西アルメニア語の学習書では, 以下のような記述を見かける。このような記述からも, 西アルメニア語は, 名詞曲用の規則化・平準化が東アルメニア語よりも進んでいることが窺える。

- (22) a. Notons que dans la branche occidentale, il y a tendance à décliner en *-i* des substantifs qui, en arménien classique, avaient des déclinaisons différentes, *-an* ou *ua=va*. (Der Merguerian 2012)
- b. Excepting the irregular nouns, and those of the sixth regular declension [*-ut'wn* (YK)], all nouns may also follow the first declension (the most usual paradigm) [*-i* (YK)]; but for the sake of *euphony*, the learner is advised to decline every noun after the proper forms of its declensions. (Gulian 1990)
- c. ... nouns declined in different than *i* patterns, which are often specified as irregular declensions, tend to shift to *i* in contemporary speech. ... Thus, *i* is not only dominant in singular, but also shows a productive tendency to cover other declensions. (Hagopian 2007)

*42 これらの語が重複複数形になっていることについては, 言語外の事情も絡んでいる可能性がある。日本語の「子供」という語は, 形態的には複数概念「～供」であるはずだが, 現在では単数概念でも使われ, 形の上でさらに複数にした「子供達」もある。西アルメニア語の *tla-k'-ner* は, 形態的にまさに日本語の「子供達」と等しい。一般的には, 形態論的に単数が無標〔通常〕で, 複数有標〔特別〕である。しかし, 子供については, 家族内や遊び等で何人かがともにいるのが現実の世の中では普通「通常」である(あった)。つまり, 形態的には有標である複数形の「子供」は, 現実の社会では通常の状態となる。この「通常」という状態を再度, 形態論に戻すと, 「子供」は無標, つまり, 単数ということになり, 新たな複数形「子供達」を派生させることにつながる。これは, 形態論の世界と現実の世界にずれがあるために起こる。同様に「親」も複数(父母の二人)いるのが通常の状態だと捉えられるため, それが西アルメニア語で *cnol-k'-ner* のような重複複数形を生み出す動機になったと考えられる。

- d. It is a safe rule to follow the forms of the simple basic declension [-i (YK)] as much as possible. The above irregular forms were indicated here because the student will meet them constantly and they should not puzzle him. (Andonian 1999)
- e. If you listen carefully, you will hear speakers overgeneralize the -i. In fact, many rarely use anything except the -i ending to express 's or of. ... In speech, the -i ending is displacing the other endings, so that, with the exceptions of -ut 'iwn abstract nouns, infinitives (-u) and -uan nouns of time, -i is being used with greater frequency and less stigma. ... When in doubt, the all-purpose -i ending is ready and able to do the job. ... When in doubt, the all-purpose -i ending is the safest to use. (Samuelian 1989a)

以上、考察したように、現代アルメニア語は膠着的形態を発達させており (cf. Dum-Tragut 2002), そして、西アルメニア語のほうが東アルメニア語よりもなお膠着的であると言ってよいだろう。

次に統語に目を移すと、現代のアルメニア語は主要部後続型である：基本語順 SOV (語順は比較的自由), 形容詞一名詞, 属格一名詞, 多数の後置詞等々。

東アルメニア語では、所与の要素を(助)動詞の直前に置く (=所与の要素の直後に(助)動詞を置く) ことによって、当該の要素が焦点と解釈され、対照・強調・排他といった意味を伝える (cf. Bardakjian & Vaux 1999, Comrie 1984, Dum-Tragut 2009, Gevorkian 2000, Tamrazian 1991) ^{*43}。定形(助)動詞の直前が焦点位置になるのは、トルコ語やグルジア語等とも共通する特徴である。

- (23) a. Siranə Surikin sirum ē. "Siran likes Surik."
Siran-DEF Surik-ACC-DEF love-PRS.PRT is
- b. Siranə Surikin ē sirum. "Siran likes SURIK./It is Surik that Siran likes."

アルメニア語では、疑問の対象となる要素が強勢と上昇イントネーションを伴うことによって疑問文が形成される。英語のように特定の語順変化を必然的に伴うわけではないが、疑問の対象となる要素は焦点になるため、(助)動詞直前に来ることが多い。

- (24) a. Hima Aramə gnum ē tun. "Aram is going home now."
now Aram-DEF go-PRS.PRT is home

*43 Hagopian(2007)は、西アルメニア語でも強調された要素(焦点要素)の近くに助動詞が来ることができると述べるとともに、東アルメニア語のほうが語順の自由度が高い (flexible)と指摘している。Dum-Tragut(2002)は、(助)動詞の直前への移動という統語的手段を用いた焦点化は、古典アルメニア語や西アルメニア語には見られず、東アルメニア語のみの特徴であると主張している。

- b. Hima Aramə gnum ē tun?^{*44} "Is Aram going home now?"
 c. Hima Aramn ē gnum tun? "Is ARAM going home now?"
 d. Hima Aramə tun ē gnum? "Is Aram going HOME now?"
 e. Hima ē Aramə gnum tun? "Is Aram going home NOW?"

また、疑問詞は、その意味からして焦点になるため、通常、焦点位置、すなわち、(助)動詞の直前に置かれる^{*45}。

- (25) a. Aranə or girk'n ē kardac'el? "Which book has Aran read?"
 Aran-DEF which book-DEF is read-PRF.PRT
 b. Or girk'n ē Aranə kardac'el? "Which book has Aran read?"
 which book-DEF is Aran-DEF read-PRF.PRT

(26) 複数個の疑問詞

- a. Ov umn ē sirum? "Who likes whom?"
 who whom-DEF is love-PRS.PRT
 b. Umə ov ē sirum? "Who likes whom?"
 whom-DEF who is love-PRS.PRT
 c. Ov inč'pes ē grum? "Who is writing how?"
 who how is write-PRS.PRT
 cf. *Inč'pes ov ē grum?
 d. Ortel ov ē nstum? "Who is sitting where?"
 where who is sit-PRS.PRT

Hewitt(1995)や Harris(1981)によると、グルジア語でも動詞直前が疑問詞にとつての定位置である。

(27) グルジア語

- a. šeni da vis elaparakeboda? "To whom was your sister speaking?"
 your sister who-DAT speak-IMPRF
 b. šens das vin elaparakeboda? "Who was speaking to your sister?"
 your sister-DAT who speak-IMPRF

- (28) a. vin ras qidulobs? "Who is buying what?"
 who what-ACC buy-PRS
 b. *vin qidulobs ras? / *ras qidulobs vin? / *ras vin qidulobs?

*44 アルメニア文字では、疑問の対象となる語のアクセント母音（通常は最終音節）に疑問符「[◌]」が付く：(24)c. Հիմա Արամն է գնում տուն։（文末は平常文と同じ終止符。アルメニア語の句読点については、本稿末の補遺を参照）

*45 主語や目的語が疑問詞となった場合は、文頭に来ることが多い。その場合、（東）アルメニア語では、（助）動詞がその直後に来る。cf. Dum-Tragut(2009), Sakayan(2000,2007, 2012); Der Merguerian(2012)

ところが、理由を問うアルメニア語の疑問詞 *inč'u* 「なぜ」では、疑問詞が動詞直前に置かれるという制限が緩みやすい (cf. Comrie 1984)。

- (29) a. *Erkink'ə inč'u ē kapuyt?* "Why is the sky blue?"
 sky-DEF why is blue
 b. *Erkink'ə inč'u kapuyt ē?* "Why is the sky blue?"
 sky-DEF why blue is

「なぜ」を意味する疑問詞の位置が他の疑問詞に比べて流動的であることは、トルコ語やグルジア語でも指摘されている。トルコ語でも、動詞（述語）の直前が疑問詞にとってもっと普通の位置である。特に、格語尾がない名詞や斜格名詞は、動詞の直前に置かれなくてはならない (Göksel & Kerslake 2000)。

(30) トルコ語

- Necle neden korkuyor?* "What is Necle scared of?"
 Necle what-ABL fear-PRS

ところが、Göksel & Kerslake(2000)によると、同じ *neden* が「なぜ」を意味する場合、動詞よりも前であれば、どの位置にでも現れることができる。Harris (1984)によると、グルジア語の *ratom* 「なぜ」も、疑問詞を主動詞の直前に置くという規則に準じた(31)a.の語順が最もよいが、b.や c.も文法的である。さらに *ratom* が動詞よりも後に来ない限り、他の語順も文法的である。他の疑問詞の場合は、(31)b.や c.の語順は非文法的になる。

(31) グルジア語

- a. *vanom mt'eli bargi t'vit'on ratom unda miitanos?*
 Vano-ERG whole baggage EMPH why MODAL carry
 "Why should Vano carry all the baggage himself?"
 b. *ratom vanom mt'eli bargi t'vit'on unda miitanos?*
 c. *ratom vanom t'vit'on unda mt'eli bargi miitanos?*

Dum-Tragut(2002)は、トルコ語も、東アルメニア語と同じように、典型的には動詞の直前が焦点位置になると指摘し、両言語の共通性の背景に言語接触があるのではないかと示唆している^{*46}。

本章では、現代アルメニア語の文字、音声・音韻、形態・統語に観られる地

*46 この統語的手段をもつ周辺言語からなぜ西アルメニア語が影響を受けなかったかについて、Dum-Tragut(2002)は、西アルメニア語が問題の焦点化が慣用化・文法化される前の早い段階で東アルメニア語よりも先に標準化され、そして、西アルメニア語の規範については古典アルメニア語から強い影響があったからではないかと推測している。実際には古典語に存在しない形式 *tloc'* や *tlerk'* ((19)や(21)c.を参照)等も、古典語をモデルにして当時のアルメニア語を「純化」させようとした意識の産物かもしれない

域的特徴について考察した。従来指摘されてきたように、印欧系の現代アルメニア語が非ヨーロッパ的な言語的様相を多数呈していることの背景にチュルク語やコーカサス諸語^{*47}等の周辺地域の諸言語からの影響ないし言語連合的な共有性があるのは否定できないと思われる。次章では、アルメニア語がバルカン・アナトリア地域の一員であることを示す、さらなる言語現象として *evidentiality* を取り上げ、詳しく考察する。

2. アルメニア語の *evidentiality*

五世紀から規範的文語として君臨してきた古典アルメニア語も、長い歴史の中で変容してきた口語との乖離が著しくなり、大衆が理解するには困難を伴うものとなった。例えば、動詞活用の体系は、以下のような変遷を辿った (Hovsepian 1996) ^{*48}。

- (32) 法： <古典> 3 種 (直説法, 命令法, 接続法)
 → <中世, 現代> 5 種 (直説法, 命令法, 接続法, 条件法, 義務法)
 時制： <古典> 1 3 種 (直説法 7, 接続法 4, 命令法 2)
 → <中世, 現代> 1 6 種 (直説法 9, 接続法・条件法・義務法各 2,
 命令法 1)

法	時制	古典	中世	現代 (東)
義務法	未来	—	piti grem	piti grem
接続法	未来	—	grem	grem
条件法	未来	—	(ku grem)	kgrem
直説法	現在	grem	ku grem	grum em
命令法		grea	grē	grir
接続法	未来 I	gric'em	—	—
	未来 II	gresc'em	—	—

19 世紀までの長きにわたり、規範的文語としてその地位に居続けてきた古典アルメニア語に代わる新しい現代文語として生まれたのが、東アルメニア語と西アルメニア語である。しかしながら、両者は異なる方言が基盤となって形成されたため、前章で見たように、音声・語彙・文法の面で相違点が存在する。動詞の活用体系や形態に観られる両文語の違いも小さくはない。

*47 Dum-Tragut(2002)は、古典アルメニア語の分詞構文とグルジア語の能格の間にある類似性について論じている。

*48 Seropian(1980)は、現代アルメニア語が古典アルメニア語から直接発展したという考えに疑問を呈している。

(33)現代語の動詞活用体系

西アルメニア語	東アルメニア語
直説法 現在 : kə + 単純形 未完了過去 : kə + 単純形過去 アオリスト[過去] : (-c'-) 未来 : piti + 単純形 過去未来 : piti + 単純形過去 現在完了 I : V-ac + BE 過去完了 I : V-ac + BE 過去 現在完了 II : V-er + BE 過去完了 II : V-er + BE 過去 接続法 現在(未来) : 単純形 過去 : 単純形過去 命令法	直説法 現在 : V-um + BE 未完了過去 : V-um + BE 過去 アオリスト[過去] : (-c'-) 未来 : V-elu/-alu + BE 過去未来 : V-elu/-alu + BE 過去 現在完了 : V-el + BE 過去完了 : V-el + BE 過去 接続法 現在(未来) : 単純形 過去 : 単純形過去 命令法 条件法 現在(未来) : k-単純形 過去 : k-単純形過去 義務法 現在(未来) : piti + 単純形 過去 : piti + 単純形過去

表(33)において、V は本動詞語幹を、-は接辞として付くことを、+は独立した語が組み合わさることを表す。BE は、コピュラ動詞（存在動詞）を指し、人称・時制を担う助動詞（主動詞）として機能する。多くの場合、本動詞の分詞形がこの助動詞と組み合わせたり、分析的に活用形が作り出される。例えば、東アルメニア語の現在形と未完了過去形は現在分詞 V-um とコピュラ存在動詞 BE から成り立っており、英語で言えば"(he) is/was doing"のような表現に基づいている^{*49}。「単純形」と呼ぶものは動詞語幹と人称語尾のみから成る形式を指す。なお、先述したように、東西の現代語は破裂音・閉鎖音の体系が異なるため、西アルメニア語の kə, piti, -ac と表記されたものは各々 [gə], [bidi], [adz] と発音される。

西アルメニア語では、通常、条件法と義務法をパラダイムとして設定しないが、意味的・用法的には、過去未来「piti + 単純形過去」が条件法に、「未来

*49 Johanson(2006b)は、近隣の言語でも同じ表現が発達していることに触れ、これらとチュルク語との関連について言及している。

分詞＋コピュラ動詞」の組み合わせが義務法に相当する表現として用いられる^{*50}。

東アルメニア語と西アルメニア語の動詞活用における大きな相違点の一つは、同じ形式がその基本機能を異にする場合があることである。

- (34) a. k-/kə 動詞 (単純形) 東：条件, 西：現在・過去^{*51}
 b. piti + 動詞 (単純形) 東：義務, 西：未来

(34)a.について：東アルメニア語の k-は、語頭が子音の動詞に前接する際、文字に反映されない[a]が挿入されて発音される。西アルメニア語の kə は、母音始まりの動詞で ə が欠落する^{*52}。つまり、両者は、正書法に違いはあるが、その音声的振る舞いは同じである。

(34)b.について：現代アルメニア語では、(命令形を除き) 主動詞（多くはコピュラ助動詞）に接頭辞 č'-を付して否定が作られるが (cf. (35)), この活用形では否定接頭辞の現れる場所が東西で異なる。東アルメニア語では(通常は) piti に、西アルメニア語では本動詞に付く："I must/will write" piti grem → (東) č'piti grem^{*53}, (西) piti č'grem. 東アルメニア語の piti は, petk' ē でも代用され、後者の表現は西アルメニア語でも「必要がある」という意味で使われる。

このような「同音異義」がどのような史的経緯で生じたのか、また、形式だけではなく、実際の用法においてはどのような相違点や類似点があるかについては、興味深い問題であるが^{*54}、今回、本稿で注目したいのは、東西アルメニ

*50 過去未来は英語に直訳すれば, will の過去形 would, すなわち仮定法に相当することになる。東アルメニア語では、「未来分詞-elu/-alu + BE」で未来形を作るが、未来分詞は、どちらのアルメニア語でも不定詞の与格と同形である。英語の"be to V"が予定や義務等を表すことがあり, to を与格と捉えれば, 形式・用法が両言語で通じるところがある。

*51 アルメニア語研究者アチャリヤン(H. Ačariyan)は、数十ものアルメニア語方言を分類する際に現在形(及び未完了過去形)で使用される形式の違いをその基準とした。

(*Classification des dialectes arméniens* 1909, Paris)

*52 西アルメニア語では, kə は動詞と分離して書かれる。母音 ə の欠落は正書法にも反映させて k'(k')と表記し、後続の動詞と続けて書く。Khachatryan(1996)によると, kə (中世では ku) の起源は「kay "is, stand" + u "and"」である。

*53 Gevorkian(2000)は、東アルメニア語でも本動詞に否定接頭辞が付く形を挙げているが、一般的ではないとしている。Tioyan et al.(2007)は、強調する必要がある場合は、本動詞のほうが否定形になると述べている。

*54 東アルメニア語の義務法と条件法を未来形の一種だとする見解もある (cf. Fairbanks & Stevick 1989, Gevorkian 2000, Zorc & Baghdasarian 1995)。Gevorgyan-Ninness(2008)は、動詞のアスペクトによっては義務的モダリティが未来時制として解釈されることがあると指摘している (cf. Der Merguerian 2012, Dum-Tragut 2002, 吉村 2013)。なお、バルカン言語連合では、未来時制が「modal + 接続法」によって表現されるが (cf. Tomić 2004, 2006), (西)アルメニア語の(34)b.もそれと同じ表現方法である (単純形=接続法)。

ア語の完了形とその用法である。

東アルメニア語の完了形に現れる本動詞の-el 形も西アルメニア語の完了形 II に現れる-er 形も古典語の完了分詞-eal を継承するものである。西アルメニア語では末尾の l が r になっており、この変化については、トルコ語のアオリスト形（超越形）*gelir-im* からの干渉が指摘されている（cf. Donabédian-Demopoulos & Ouzounian 2008）。Lewis(2000²)は、*gelir idim, görür idim* 等のように形態が分離したトルコ語の非規範的なアオリスト形を「アルメニアなまり (Armenianism)」だと述べているが、これも西アルメニア語の-er の成立にトルコ語との接触が関与していると考えられる傍証になるだろう。ただし、西アルメニア語の完了分詞革新形-er の誕生には内部要因も関わっているようである。

(35) *vaz-el* "to run" : 二人称単数の活用形

		西アルメニア語		cf. 東アルメニア語 ^{*55}	
		肯定	否定	肯定	否定
命令法		<i>vazê</i>	<i>mí vazer</i>	<i>vazír</i>	<i>mí vazir</i>
現在		<i>kə vazes</i>	<i>č'es vazer</i>	<i>vazum es</i>	<i>č'es vazum</i>
		条件		<i>kvazes</i>	<i>č'es vazi</i>
未完了過去		<i>kə vazēir</i>	<i>č'ēir vazer</i>	<i>vazum ēir</i>	<i>č'ēir vazum</i>
現在完了 II		<i>vazer es</i>	<i>č'es vazer</i>	<i>vazel es</i>	<i>č'es vazel</i>

Donabédian-Demopoulos & Ouzounian(2008)は、古典語から継承された命令法否定形（禁止形）が西アルメニア語において現在や未完了過去の否定形の中で否定分詞として広まり、類推の結果、完了 II において l → r の変化を内部的に引き起こしたと考え、そして、この r 語尾の広がりをも後押ししたのがトルコ語のアオリスト形であると推論している。

表(33)では西アルメニア語の完了 I に対応する形式が東アルメニア語の欄に挙げられていない。実は、後者にも結果分詞-ac がコピュラ動詞を伴い、述語的に用いられる構文があり、主語の結果状態を表す（後継の(59)と(60)を参照）。しかし、東アルメニア語では、この構文が使える動詞に制限があり、他動詞の受動形と一部の自動詞（「座る、立つ」等の位置動詞、「怒る、疲れる」等の心理動詞）に限られ、終結点を含まない(non-terminative)自動詞（継続動詞、意思動詞、所有動詞等）や目的語を伴う他動詞は、通常、当該の構文に現れない（cf. Eggenstein-Harutunian 2008³, Der Merguerian 2012, Garibyan & Garibyan 1980, Gevorkian 2000, Kozinceva 1988, Sakayan 2007）。さらに、結果分詞+コピュラ動詞の組み合わせは、先の表に挙げた他の活用形と異なる振る舞いをする点がある。コピュラ動詞が単独で本動詞となっている時、その三人称単数現在形 ē

*55 東アルメニア語の命令法では、基本的に肯定と否定が同形で、口語では末尾の r が省略されることがある。また、形式の上で西アルメニア語の現在形等に対応する東アルメニア語の条件法の否定形に現れる否定分詞は、末尾の r を欠く。

の否定形は, չ'ē であるが, 表(33)の活用形で助動詞として機能する場合は, չ'i となる。しかし, 結果分詞-ac と共起する場合は, 本動詞の形式 չ'ē のままでもよい (cf. Eggenstein-Harutunian 2008, Hagopian 2005, Sakayan 2007, Tioyan et al. 2007)。また, 通常, 否定形では, 「助動詞 (= コピュラ動詞) 否定形ー本動詞」の語順になるが, 結果構文では「結果分詞ーコピュラ動詞否定形」のみが可能で, (たとえ, 三人称単数現在で չ'i が使用されても) その順序を入れ替えて, 他の活用形の否定と同じ語順にすることはできない (cf. Gevorkian 2000, Sakayan 2007) *56。結果分詞が単独で名詞や形容詞として機能する点は, 両文語に共通するが, 上記の点から, コピュラ動詞と結果分詞の組み合わせを東アルメニア語で時制活用形に含めるか否かは見解が分かれる (cf. Abrahamyan et al. 1976, Kozinceva 1988, Kozintseva 2000, Minassian 1980)。他方, 西アルメニア語の-ac による完了 I は, 極めて生産的で, 目的語を伴う他動詞でも可能であり, パラダイムの一つとして確立している。助動詞の否定形は չ'ē であるが, 語順は, 「結果分詞ーコピュラ動詞否定形」だけでなく, 「コピュラ動詞否定形ー本動詞」も可能である (後掲の(48)を参照)。

西アルメニア語の完了 I と完了 II, そして, 東アルメニア語の完了 (と参考として結果構文) の活用形の例を以下に挙げる。

(36) 完了形活用表 (肯定)

西アルメニア語			東アルメニア語	
※	gr-el ^{*57} "to write"	kard-al "to read"	nst-el "to sit down"	barkan-al "to get angry"
現在完了 I			cf. 結果構文 (現在)	
1sg.	grac em	kardac'ac em	(nstac em	barkac'ac em)
2sg.	grac es	kardac'ac es	(nstac es	barkac'ac es)
3sg.	grac ē	kardac'ac ē	(nstac ē	barkac'ac ē)
1pl.	grac enk'	kardac'ac enk'	(nstac enk'	barkac'ac enk')
2pl.	grac ēk'	kardac'ac ēk'	(nstac ek'	barkac'ac ek')
3pl.	grac en	kardac'ac en	(nstac en	barkac'ac en)
過去完了 I			cf. 結果構文 (未完了過去形)	
1sg.	grac ēi	kardac'ac ēi	(nstac ēi	barkac'ac ēi)
2sg.	grac ēir	kardac'ac ēir	(nstac ēir	barkac'ac ēir)
3sg.	grac ēr	kardac'ac ēr	(nstac ēr	barkac'ac ēr)
1pl.	grac ēink'	kardac'ac ēink'	(nstac ēink'	barkac'ac ēink')
2pl.	grac ēik'	kardac'ac ēik'	(nstac ēik'	barkac'ac ēik')
3pl.	grac ēin	kardac'ac ēin	(nstac ēin	barkac'ac ēin)
現在完了 II			現在完了	
1sg.	grer em	kardac'er em	grel em	kardac'el em
2sg.	grer es	kardac'er es	grel es	kardac'el es

*56 ただし, Arutyunyan & Bure(2008)は, 両方の語順を挙げている。

*57 cf. grabar "written language=Classical Armenian"

3sg.	grer ē	kardac'er ē	grel ē	kardac'el ē
1pl.	grer enk'	kardac'er enk'	grel enk'	kardac'el enk'
2pl.	grer ēk'	kardac'er ēk'	grel ek'	kardac'el ek'
3pl.	grac en	kardac'er en	gral en	kardac'el en
過去完了 II			過去完了	
1sg.	grer ēi	kardac'er ēi	grel ēi	kardac'el ēi
2sg.	grer ēir	kardac'er ēir	grel ēir	kardac'el ēir
3sg.	grer ēr	kardac'er ēr	grel ēr	kardac'el ēr
1pl.	grer ēink'	kardac'er ēink'	grel ēink'	kardac'el ēink'
2pl.	grer ēik'	kardac'er ēik'	grel ēik'	kardac'el ēik'
3pl.	grer ēin	kardac'er ēin	grel ēin	kardac'el ēin

※動詞に付く -el や -al は不定詞語尾である。どちらが付くかは動詞によって決まっている（西アルメニア語には、他に -il や -ul もある）。規則的な -el 動詞（と -il 動詞）は、現在語幹（不定詞の語幹に同じ）をもとに結果分詞 -ac と完了分詞 -er/-el が作られる。規則的な -al 動詞（や不規則動詞）は、過去語幹（アオリスト語幹； -al 動詞では「語幹-ac'-」）から当該の分詞が形成される。

西アルメニア語の完了 I も東アルメニア語の完了も、その名が示すとおり、完了の意味を持つ^{*58}。同時に、西アルメニア語には、もう一つの完了形、すなわち、完了 II がある。では、西アルメニア語の二種の完了形は機能的に（どのように）異なるのだろうか。また、形式的に西アルメニア語の完了 II に相当する東アルメニア語の完了は、それらと機能的にどのように対応するのだろうか。そのための鍵となるのが *evidentiality* と呼ばれる言語的概念である。

2.1. Evidentiality

Evidentiality という言語的カテゴリーは、特に 1980 年代から盛んに研究されている。*Evidentiality* は、個々の言語で多彩に異なった様相を示すため、*evidentiality* に属する（または、関連する）機能に対し、対象言語の個別的実情に沿って様々な用語が提案されている。

- (37) a. indirect(ive), mediative, nonconfirmative, inferential
 b. unwitnessed, noneyewitness, quotative, reported, (ad)mirative, dubitative
 c. 証拠性、明証性、実相、証言確度、証言度；確言／概言、
 断定／推量／伝聞^{*59}

それゆえ、*evidentiality*（やその同類用語）の定義については、研究者間で異

*58 (36)に挙げた東アルメニア語の結果構文の例はそれぞれ「座っている」状態と「怒っている」状態を表すが、西アルメニア語においても、一部の自動詞では、完了 I と同じ形式が結果状態も表す。cf. Kozinceva(1988), Sakayan(2000,2007,2012)

*59 亀井他編(1995)には、*evidentiality*（の訳語）が見出し語として掲載されていない。

なりを示す部分もあるが、その中心的概念は陳述の情報源（根拠）を表すことにある。

- (38) Evidentiality is a linguistic category whose primary meaning is source of information. ... this covers the way in which the information was acquired, without necessarily relating to the degree of speaker's certainty concerning the statement or whether it is true or not. (Aikhenvald 2004)

また、言語によっては、evidentiality がモダリティー的なニュアンスを帯びたり、当該機能を法助動詞等が担ったりすることがあるため、モダリティーの一種（下位概念）と捉えられることもあるが、時制や相がモダリティーと関連しても別物であるのと同じように、evidentiality も独立した言語的カテゴリーとする立場が主流である。

- (39) Evidentiality is a category in its own right, and not a subcategory of epistemic or some other modality, or of tense-aspect. (Aikhenvald 2003; cf.(38))

具体的な例を挙げれば、アマゾン北西部の Tucano 語では、話者が述べた出来事をどのようにして知ったかというその情報源、言い換えれば、そのような出来事があると述べることのできる根拠を動詞活用接辞で示す必要がある (Aikhenvald 2004)。

- (40) a. diâyî wa'î-re yaha-ámi.
 "The dog stole the fish." (I saw it)
 b. diâyî wa'î-re yaha-ásî.
 "The dog stole the fish." (I heard the noise)
 c. diâyî wa'î-re yaha-ápî.
 "The dog stole the fish." (I inferred it)
 d. diâyî wa'î-re yaha-ápi'.
 "The dog stole the fish." (I have learnt it from someone else)

太字で示した接辞が evidentiality を表す。上の例においては、evidentiality が「近過去」時制と融合した形態で現れている。(40)a.の-ámi は、視覚(visual)による情報として、b.の-ásî は、視覚以外の感覚(non-visual)（聴覚等）による情報として、c.の-ápî は、状況からの推論(inferred)として、そして、d.の-ápi'は、他者から得た(reported)情報として、出来事が語られている。

個別言語的な研究が蓄積してきたことにより^{*60}、それらの成果を背景にした類型論的研究やそのための枠組み作りに関する提案もなされてきた。まず、

*60 Chafe & Nichols(1986), Guentchéva(1996), Johanson & Utas(2000), Aikhenvald & Dixon(2003), Guentchéva & Landaburu(2007), Diwald & Smirnova(2010) 等。

Willett(1988)が Chafe & Nichols(1986)等のデータをもとに類型論的見地から evidentiality の基盤的意味を提案した。

- | | |
|---|--|
| <p>(41) I. Direct evidence (Attested)</p> <ul style="list-style-type: none"> A. Visual evidence B. Auditory evidence C. Other Sensory evidence | <p>II. Indirect evidence</p> <ul style="list-style-type: none"> A. Reported evidence <ul style="list-style-type: none"> 1. Second-hand evidence 2. Third-hand evidence 3. Evidence from folklore B. Inferring evidence <ul style="list-style-type: none"> 1. Inference from results 2. Inference from reasoning |
|---|--|

Aikhenvald(2004)は、豊富な言語データ（500 言語以上）に基づいた類型論的研究の成果として、evidentiality の情報源として 6 つの意味パラメーターを設定し、それらが文法化される組み合わせを詳細な類型として示した。

- (42) a. semantic parameters
 Visual, Non-visual sensory, Inference, Assumption, Hearsay, Quotative
- b. organization of systems
- Systems with two evidential choices
 - A1. Firsthand and Non-firsthand;
 - A2. Non-firsthand versus 'everything else';
 - A3. Reported (or 'hearsay') versus 'everything else';
 - A4. Sensory evidence and Reported (or 'hearsay');
 - A5. Auditory (acquired through hearing) versus 'everything else'.
 - Systems with three evidential choices
 - B1. Direct (or Visual), Inferred, Reported;
 - B2. Visual, Non-visual sensory, Inferred;
 - B3. Visual, Non-visual sensory, Reported;
 - B4. Non-visual sensory, Inferred, Reported;
 - B5. Reported, Quotative, 'everything else'.
 - Systems with four evidential choices
 - C1. Visual, Non-visual sensory, Inferred, Reported
 - C2. Direct(or Visual), Inferred, Assumed, Reported
 - C3. Direct, Inferred, Reported, Quotative
 - Systems with five evidential choices
 - D1. Visual, Non-visual, Inferred, Assumed, Reported

Plungian(2010)は、情報のアクセス方法として二つの基本軸（direct/indirect と personal/non-personal）を設け、evidentiality の類型の中でもっとも基本的なものとして三項対立のシステム（Aikhenvald 2004 の B1 に相当）を提案した。

- (43) Direct/Personal[=Attested, Witnessed, Firsthand, Confirmative]
- Participatory/Endophoric; <Common knowledge>
 - Visual (with subtypes)
 - Non-visual [=Sensory]
- Indirect/Personal
- Inferential (based on observed results)

- Presumptive (based on plausible reasoning); <Common knowledge>
Indirect/Non-personal
- Reported (with subtypes)

他のシステム（類型）は、これを縮小したり、拡張したりしたものであると見なされる。縮小されたシステム、つまり、二項対立で広く観られるタイプが、Aikhenvald(2004)の A1 や A2 に相当する、汎用的な evidential 標識を備えたシステムである (cf. Plungian 2010)。汎用的な標識は、具体的な情報源を明示せずに、情報が間接的に入手されたことのみを伝える。Aikhenvald(2003)も、evidentiality の体系を(I)情報源を特定しないが、その存在を示すものと(II)情報源の種類を特定するものとの二種類に大きく分けることができると論じているが、(I)のほうが汎用的な evidential 標識を備えたシステムであり、先行研究において "Indirective" 《間接形》 (Johanson 2000 他)や "Mediative" 《媒介形》 (Guentchéva 1996)等の名で言及されるものである。

Johanson(2000,2003,2006a)によると、《間接形》(《間接性》 (Indirectivity)) とは、陳述内容を間接的なものとして提示するものであり、出来事をどのようなことを通じて知ったかに関するその具体的な情報源は特定しない。

- (44) In languages possesssing indirective categories, the propositional content is presented in an indirect way. ... Specification of the source of information - the way in which the event is acknowledged by the recipient - is not criterial for indirectivity as such. (Johanson 2006a)

《間接形》を具現化している言語にトルコ語がある。この言語では過去を表す活用接辞が二つあり、-DI は直接的経験を、-mİş は間接的経験を表すとされる (Aksu-Koç & Slobin 1986, Slobin & Aksu 1982 他) ^{*61}。

- (12) Kemal gel-miş. "Kemal came."
Kemal come-mİş

Slobin & Aksu(1982)によると、上記の例は、ケマルが来たのを実際は目撃していないが、(a)例えば、ケマルのコートを見て「推論」したり、(b)誰かからの「伝聞」であったり、(c)例えば、ドアを開けるとそこにケマルがいるのに気づき「驚嘆」したりした場合に用いるという。つまり、トルコ語の-mİş は、Tucano 語のように情報源を具体的・個別的に明示はしないが、出来事の発生を示す何らかの証拠が存在しており、それに基づいて発話していることを伝える《間接形》である。

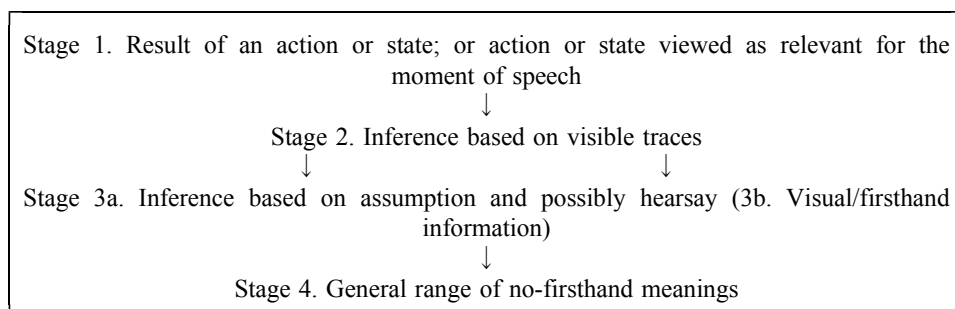
完了形が evidentiality, 特に《間接形》に発達することが多くの先行研究で

*61 いずれの接尾辞も、母音調和等による異形態を持つ。なお、-DI は、直接的経験であるか否かを不問にして使われることもある。つまり、Aikhenvald(2004)の A2 に相当する。

指摘されている。

- (45) a. With the perfect, a past event is related to a present state, in other words the past event is not simply presented per se, but because of its relation to a present state. With the inferential, the past event is again not presented simply per se, rather it is inferred from some less direct result of the action... the semantic similarity (not, of course, identity) between perfect and inferential lies in the fact that both categories present an event not in itself, but via its results... (Comrie 1976)
- b. The postterminal perspective implies that, at a given aspectual vantage point, the decisive limit of the event is already passed over... The event is totally or partly absent from the view, depending on the actional content, but it is still relevant at the vantage point, possibly through observable results or traces... In many languages, postterminals, e.g. 'perfects' expressing past events with present relevance, tend towards indirective readings. (Johanson 2003)

(46) Evidential extensions for perfects and resultatives (Aikhenvald 2004)



実際、トルコ語の-miş (と-DI) もその起源は完了に遡る (cf. Aksu-Koç & Slobin 1986, Johanson 2003)。

(47) 古代チュルク語 (庄垣内 1989)

アオリスト-ar, 完了 I (確定)-tī, 完了 II (確定)-yuq, 完了 III (不確定)-mīš

これらのことを念頭に置いて、以下では現代アルメニア語の完了形が表す意味について見ていく。

2.2. 西アルメニア語の二つの完了形と evidentiality

先に述べたように、西アルメニア語には二種類の完了が存在する。すなわち、-ac 分詞 (結果分詞) からなる完了 I と -er 分詞 (完了分詞) からなる完了 II である。両者の類似点や相違点に関しては様々な見解がある。Hagopian(2005)に

よると、両者は実質的に同義であるが、文体や使用頻度の点で異なり、また、否定形では、使用頻度の点で完了Ⅰのほうが圧倒的で、完了Ⅱはまれである。否定形の使用頻度における差が大きいのは、その形式にも原因がある。規則的な-el 動詞では、(三人称単数を除く) 現在完了Ⅱと現在の否定形が、そして、規則的な-il 動詞も含め、過去完了Ⅱと未完了過去の否定形が同形になってしまうため、混同をさけるために「実質的に同義である」完了Ⅰが用いられるからである (cf. Bardakjian & Thomson 1977, Feydit 1969², Sakayan 2012⁶², Samuelian 1989a)。

(48) 完了等の肯定形と否定形

西アルメニア語

		gr-el "to write"		kard-al "to read"	
		肯定	否定	肯定	否定
現在完了Ⅰ					
3sg.	grac ē	č'ē grac	~ grac č'ē	kardac'ac ē	č'ē kardac'ac ~ kardac'ac č'ē
3pl.	grac en	č'en grac	~ grac č'en	kardac'ac en	č'en kardac'ac ~ kardac'ac č'en
過去完了Ⅰ					
3sg.	grac ēr	č'ēr grac	~ grac č'ēr	kardac'ac ēr	č'ēr kardac'ac ~ kardac'ac č'ēr
3pl.	grac ēin	č'ēin grac	~ grac č'ēin	kardac'ac ēin	č'ēin kardac'ac ~ kardac'ac č'ēin
		肯定	否定	否定	肯定
			現在完了Ⅱ		現在
gr-el "to write"	3sg.	grer ē	č'ē grer	č'i grer	kə grē
	3pl.	grer en	č'en grer	č'en grer	kə gren
erg-el "to sing"	3sg.	erger ē	č'ē erger	č' 'erger ^{*63}	k'ergē
	3pl.	erger en	č'en erger	č'en erger	k'ergen
xōs-il "to speak"	3sg.	xōser ē	č'ē xōser	č'i xōsir	kə xōsi
	3pl.	xōser en	č'en xōser	č'en xōsir	kə xōsin
kard-al "to read"	3sg.	kardac'er ē	č'ē kardac'er	č'i kardar	kə karday
	3pl.	kardac'er en	č'en kardac'er	č'en kardar	kə kardan

*62 Sakayan(2000)では、完了Ⅱの否定形が挙げられているが、同書の改訂第二版にあたる Sakayan(2012)では、完了Ⅱの否定形はないという記述に変わっている。

*63 三人称単数現在のコンピュータ助動詞否定形 č'i は、母音始まりの動詞の前で č' に縮約する。文字の上では、脱落した母音の代わりに「'」が書かれる。本稿末の補遺を参照。

過去完了 II				未完了過去	
	3sg.	grer ēr	č'ēr grer	č'ēr grer	kə grēr
	3pl.	grer ēin	č'ēin grer	č'ēin grer	kə grēin
	3sg.	erger ēr	č'ēr erger	č'ēr erger	k'ergēr
	3pl.	erger ēin	č'ēin erger	č'ēin erger	k'ergēin
	3sg.	xōser ēr	č'ēr xōser	č'ēr xōser	kə xōsēr
	3pl.	xōser ēin	č'ēin xōser	č'ēin xōser	kə xōsēin
	3sg.	kardac'er ēr	č'ēr kardac'er	č'ēr kardar	kə kardar
	3pl.	kardac'er ēin	č'ēin kardac'er	č'ēin kardar	kə kardayin

東アルメニア語					
erg-el "to sing"	肯定		否定		否定 条件法 (現在)
	現在完了				
	3sg.	ergel ē	č'i ergel	č'i ergi	kergi
	3pl.	ergel en	č'en ergel	č'en ergi	kergen

nst-al "to sit down"	結果構文				現在 (直說法)	
	3sg.	nstac ē	nstac č'ē / č'i			č'i ergum
	3pl.	nstac en	nstac č'en			č'en ergum

表(48)の中で、斜体字にした否定形が同一人称においてまったく同じ形になる。ここでは三人称のみを例示したが、一人称と二人称の活用形でも、単複ともに“同音衝突”が起こる。完了 II と異なり、現在や未完了過去にはその代用となる別形式がないため、特に規則的な-el 動詞や-il 動詞では、問題の形式は現在や未完了過去の否定としての使用が優先され、完了 II の否定形としてはあまり用いられないのである (cf. Bardakjian & Thomson 1977, Samuelian 1989a)。他方、東アルメニア語ではこのような同音衝突は起こらず、完了の否定形の使用に形態上の問題は生じない。

Sakayan(2000,2012)は、現在完了 I は、過去に完了した行為で、その影響や結果が現在にも残っていることを意味し、過去完了 I は、過去に生じた別の行為よりも前に完了した行為を意味すると述べている。いずれも英語等にも観られる現在完了及び過去完了の典型的な用法である。

- (49) a. Bolor ənkernerd əkac en k'ez tesnelu. [現在完了 I]
all friend-PL-2 come-RES.PRT are-3PL you.SG-ACC meet-INF-DAT
"All your friends have come to see you." (They are still here)
- b. Erb hasank', dasn ardēn sksac ēr. [過去完了 I]
when arrive-AOR-1PL lesson-DEF already start-RES.PRT was-3SG
"When we arrived, the lesson had already started."

一方、完了 II は、Sakayan(2000,2012)によれば、過去の行為を表す使用は限

定的で、より規範的な完了Ⅰの代わりとして口語に限って用いられるとされる。両者の相違として、用いられる文体や（文体や語形に起因する）使用頻度を挙げ一方、その意味や用法にも実は異なる点があることも指摘されている。Sakayan(2000,2012)は、現在完了Ⅱに伝聞(reportative or mediative)の意味を表す使い方がありと指摘し、Hagopian(2005)も完了Ⅰと完了Ⅱが各々目撃した事実と目撃していない仮説を表すことがあると記している。

Donabédian(1996ab,2001)は、完了Ⅰがいわゆる完了を意味するのに対し、完了Ⅱは evidentiality (Donabédian の用語では mediative/仏 médiatif^{*64}) の機能を持つと主張する^{*65}。現代西アルメニア語は、多様な evidentiality を体系的に発達させた言語ではない。Tucano 語のように、例えば、陳述の情報源が視覚によるものであることを示したり、推測か伝聞かを動詞形式を変えることで明確に区別したりすることはできない。しかしながら、陳述内容が話者の直接的認知によるものでないことを示す（または、示唆）するために使用できる形式を持っている。それが、完了Ⅱである。Evidential 標識としての完了Ⅱは、情報を間接的なものとして伝えるため、《間接形》だと考えられる。この種のカテゴリーは、情報源を動詞形式によって細分・特定することはできないが、一般的には、情報の入手方法として主に伝聞(hearsay)や推論(inference)や知覚(perception)があるとされる (cf. Johanson 2000,2003,2006a 等)。Ilicak & Goshgarian(2006)は、西アルメニア語の完了Ⅰと完了Ⅱの例文をトルコ語に訳す際、(a.)前者には-DI を、(b.)後者には-mış を当てている。

- (50) a. Orat'ert'ə kardac'ac es? "Gazeteyi okudun mu?"
 newspaper-DEF read-RES.PRT are-2SG (Have you read-DI the newspaper?)
 b. girk'ə kardac'er ē "kitabı okumuş" (s/he read-MIS the book)
 book-DEF read-PRF.PRT is

西アルメニア語の現在完了Ⅱも、陳述内容が「伝聞」で得られたものであることを伝える (Bardakjian & Thomson 1977, Donabédian 1996ab,2001, Sakayan 2000,2012 他)。

- (51) a. Maron amusnac'er ē "Maro has got married (so I heard).!"
 Maro-DEF marry-RES.PRT is
 b. Anika kardac'er ē girk'ə. "He has read the book (at least, he says so)."
 he read-RES.PRT is book-DEF
 c. Lsec'i, t'e barekand eker ē, šitak ē?
 hear-AOR-1SG that friend-2 come-PRF.PRT is right is
 "I heard that your friend has come, is that true?"

*64 Hagège(2001-2002)は、médiaphorique という名称を用いている。

*65 Donabédian-Demopoulos & Ouzounian(2008) も参照

Donabédian(1996ab,2001)によると、伝聞が完了Ⅱの中心的な意味であると考えられ、母語話者にこの形式が何を意味するかを尋ねた際に返ってくる答えであり、また、特別な文脈やイントネーションがない場合にインフォーマントが挙げる解釈である。

さらに、当該形式は、「推論」により得られた事柄を表すこともできる。例えば、次の(52)は、朝、地面が濡れているのを見た際に発せられる。

- (52) Anjrew eker ē. "[Look,] it has rained."
rain come-PRF.PRT is

話者は、陳述内容が推論による解釈、すなわち、現状（「地面が濡れている」）から過去に生じたであろう出来事（「雨が降った（ためだろう）」）を推論したもので、実際にそれを目撃したわけではないことを現在完了Ⅱを用いて伝えることができる。実際に目撃したわけではないという点は、先の「伝聞」の用法と共通している（cf. Hagopian 2005）。

一方、話者が眼前で知覚した事象、つまり、実施に目撃した出来事に対して現在完了Ⅱが用いられる場合がある。このような場合にこの形式が意図するのは、先行研究で *admirative* や *mirative* と呼ばれる「感嘆」を表す用法である（Donabédian 1996ab,2001）。この場合、その意味に相応しいイントネーションを伴う必要がある。

- (53) Aljikd ē? Mecc'er ē! "Is that your daughter? (How) she has grown!"
daughter-2 is grow-PRF.PRT is

上の文は、知り合いの娘を久しぶりに見て、その成長ぶりに驚いている際の発言である。話者が予期していなかった出来事に遭遇した時の感動や驚きを表す。完了Ⅰには、そのような意味合いは含まれない（Donabédian 2001）。

Evidentiality の機能を有する西アルメニア語の完了Ⅱは、情報を直接ではなく、間接的に得たことを示す《間接形》であり、話者が直接に知覚したことを述べる例(53)とは矛盾するように思われる。Donabédian(2001)は、「感嘆」の *evidentiality* は、話者の期待と実際の状況の間にある不一致を表現すると述べている。言い換えれば、「感嘆」では、眼前の事象を目撃するまでの話者の知識内の現実と陳述内容との間に隔たりがある。一方、「伝聞」や「推論」でも、出来事を直接的には知らないという点で、話者の知識の中で現実として知っている事柄と陳述内容との間に隔たりがある。そういう意味でこれらの用法には共通性がある。情報を間接的に得たことを表明する《間接形》である完了Ⅱが眼前の事象に対して用いられた場合、それが不適切な使用になることを避けるために「伝聞」や「推論」とも異なる意味合いを帯びる（cf. Donabédian 2001）。それが「感嘆」であり、その用法への橋渡しをしてくれる要因の一つが、陳述内容と話者との間にある“隔たり”という、完了Ⅱが有する特質である。

これら三つ（「伝聞」、「推論」、「感嘆」）は、《間接形》が持つ主要な用法で、同じカテゴリーを持つアルバニア語、ブルガリア語、トルコ語にも観察されるものであるが、これに加え、西アルメニア語には、非難めいた(reproachful, argumentative)意味合いを表すことがある（Donabédian 1996ab,2001）。

(54) a. Parker ē. [現在完了Ⅱ]

lie-down-PRF.PRT is "She's lying down." (it's shocking how lazy she is)

b. Pařkac ē. [現在完了Ⅰ]

lie-down-RES.PRT is "She's lying down." (this is normal, e.g. she usually rests at this time of day, she's pregnant, she's ill etc.)

例(54)a.では、話者の私感や判断、具体的には、主語が怠けていることに對する非難的な評価を伝える意図を現在完了Ⅱが示している。これは Friedman (1979)が dubitative と呼ぶ、非難的な皮肉を表す用法に相当するだろう。

通言語的に、《間接形》の evidentiality には一人称主語の使用に制限が観察される。話者が直接的には知らない(unwitnessed)出来事を表すため、通常は一人称単数主語とは意味的に相容れないはずだが、実際は、話者が無意識の中で行った非意図的・不可抗力な行為を表すことがあり、Aikhenvald(2004)は、これを「一人称効果」と呼ぶ^{*66}。具体的には、例えば、酔っている時の行為や、夢の中の行為、他者から聞いた話者の子供の頃の出来事等である。西アルメニア語の完了Ⅱも一人称で用いることが可能である。

(55) Vay t'mrer em! "Why, [it seems] I've dozed off!"

alas fall-asleep-PRF.PRT am

(The speaker, opening his/her eyes, notices that the film he/she was watching has ended.)

Aikhenvald(2004)によると、「一人称効果」がもたらす無意識的・非意図的・不可抗力的であるという含意は、話者に心の準備がないまま突然気がついたという状況と相関しており、それは、話者にとっての驚き、すなわち、「感嘆」に結びつく^{*67}。例(55)も話者自身の無意識の行為を推測するとともに、驚きの感情が込められている（Donabédian 1996a,2000）。行為が無意識でなされたことを表す用例について、Donabédian(1996ab)は、話者である「私」が動詞の行為者である「私」との間に距離（隔たり）を置いていると解釈している。

通常、現在完了時制は過去の物語(narrative)の中で起こった出来事を述べる際に使われない。なぜならば、現在完了は過去の出来事が現在と関連していること示し、昔の物語で次々と起こる出来事は、発話時とは無関係だからである。しかし、ある言語の完了形が《間接形》の機能を持つ場合、昔話やおとぎ話、

*66 Aikhenvald (2003), Maisak & Tatevosov (2007), Plungian (2010)等も参照。

*67 Maisak & Tatevosov(2007)も参照。

伝説等の物語にそれがよく現れる^{*68}。西アルメニア語でも、evidentiality の機能をもつ現在完了Ⅱが物語で使われることがある。昔話や伝説での使用について、Donabédian(1996ab)は、出来事が語り手の個人的に経験したものではないからだと指摘し、Johanson(2000)は、語り手が物語の出来事から距離を置いているからだと述べている。

Aikhenvald(2004)は evidentiality を陳述内容の信憑性に対する話者の判断を示すカテゴリーではないと定義する。Donabédian(1996ab,2001)も完了Ⅱは、陳述内容の信憑性を疑問視するものではないと論じている。しかし、同時に、伝聞等では、特定できるか否かにかかわらず、第三者からの情報である点で、話者は、陳述内容が真実だという断言とは距離を置き、語用論的には、話者がその信憑性に多少の疑いを抱いているというような効果が生じることがあるとも指摘している。

以上のように、西アルメニア語の完了Ⅱが evidentiality, 具体的には、《間接形》・《仲介形》として機能することを見た。Donabédian(1996ab)によると、当該形式を用いるのは、話者が陳述内容から距離を置いていることを示すことにある。

完了Ⅱは、その名が示すとおり、完了の意味から evidentiality へと発達したものである。「空白」となったその完了の位置を埋めるかたちで、完了Ⅰがコピュラ助動詞を伴った結果相を表す結果分詞-ac から発達した(cf. Kozinceva 1988)。東アルメニア語で許容されない「助動詞否定形－結果分詞」の語順も西アルメニア語では問題ない。一方、コピュラ動詞の三人称単数が助動詞として機能する際の否定形は、通常、č'i となるが、現在完了Ⅰは本動詞の場合と同じ č'e のままであり、結果分詞の述語的用法から発達してきたことの名残が窺える。また、完了Ⅰは接続法や未来形(piti)とも組み合わせる。

- | | |
|---------------------|---|
| (56) a. grac əllam | "(if) I will have written" (接続法完了) ^{*69} |
| b. grac əllayi | "(if) I would have written" (接続法過去完了) |
| c. grac piti əllam | "I will have written" (未来完了) |
| d. grac piti əllayi | "I would have written" (過去未来完了 [条件法完了]) |

完了Ⅱは、表現対象が過去に実現した出来事に限定され、複合的な形式を持たず、接続法や条件法の環境では用いられない。従って、完了Ⅰと比べ、完了Ⅱは有標なカテゴリーということになる。興味深いことに、現在完了Ⅱでも、助動詞三人称単数の否定に č'e が現れる（東アルメニアの形式的に同源の完了形では č'i である。(48)を参照）。これは、他の活用形と異なり、現在完了Ⅰと

^{*68} Johanson(2000), Maisak & Tatevosov(2007)を参照。

^{*69} gr-ac は、動詞「書く」の結果分詞。əllam はコピュラ助動詞の単純形（接続法現在）、əllayi は同単純形過去（接続法過去）（ともに1人称単数形）。

共通している。恐らく、パラダイムとしては古い方の完了Ⅱが *evidential* 機能の獲得とともに有標となり、新しく生まれた無標の完了Ⅰ（頻度も高い）からの類推で、本来の形式 *č'i* が *č'ē* になったのではないかと推論できる。

いずれの完了形も、基本は過去の事象に関わる形式であるが、西アルメニア語には、過去の出来事に用いられるもう一つの時制形式としてアオリスト（単純過去）がある。完了Ⅰとアオリストは *evidential* なカテゴリーではなく、その点で完了Ⅱと異なる。Johanson(2000,2003)によると、有標の《間接形》と対立する無標項の形式は、どちらかという中立的な意味を示す、すなわち、目撃したと積極的に断じるわけではない。西アルメニア語でも、《間接形》である完了Ⅱに対し、完了Ⅰとアオリストが《直接形》*directive* として、文字通り、出来事を直接目撃したということを常に意味するわけではない^{*70}。

現在完了Ⅰとアオリストは、いわゆる完了と単純過去という点で相違する。現在完了Ⅰが、過去に終結し、現在にもその結果や影響が残っている行為を表すのに対し、アオリストは、単純に過去の行為を表し、その行為の継続性や進行性を含意しない（Sakayan 2000,2012）。

- (57) a. Bolor *ənkerneṛd ekac en k'ez tesnelu*. [現在完了Ⅰ] (= (49)a.)
 all friend-PL-2 come-RES.PRT are-3PL you.SG-ACC meet-INF-DAT
"All your friends have come to see you." (They are still here)
 b. Bolor *ənkerneṛd ekan k'ez tesnelu*. [アオリスト]
 all friend-PL-2 come-AOR-3PL you.SG-ACC meet-INF-DAT
"All your friends came to see you." (No indication whether they are still here)

また、現在完了Ⅰは一般の遠い過去を、アオリストは直近の過去を指すので、「今しがた」や「昨日」等の副詞は後者と共起しやすい（Sakayan 2000, 2012）。

- (58) a. Ays girk'ə *kardac'ac es?* [現在完了Ⅰ]
 this book-DEF read-RES.PRT are-2SG *"Have you (ever) read this book?"*
 b. Tariner aṛaj *kardac'ac em*. [現在完了Ⅰ]
 year-PL before read-RES.PRT am *"I [have] read it years ago."*
 c. Erēk *kardac'i*. [アオリスト]
 yesterday read-AOR-1SG *"I read it yesterday."*

つまり、西アルメニア語では、完了Ⅰと完了Ⅱについて、後者が *evidentiality* を示す《間接形》である点で前者と異なる。また、アオリストは、現在完了Ⅰとはアスペクト等の点で、現在完了Ⅱとは、*evidentiality* の点で異なっている。

既述したように、もう一つの現代文語である東アルメニア語は、完了形とし

^{*70} Sakayan(2000,2012)は、完了Ⅰが必ずしも話者が実際に経験したことを表すわけではないと述べている。また、西アルメニア語にも、東アルメニア語と同じような結果構文があり、これは完了Ⅰとは別物であると Sakayan(2000,2012)は指摘している。

では、西アルメニア語の完了Ⅱに相当する形式しか持たない。パラダイム体系が異なる東アルメニア語において、その完了形はどのような機能を有するのだろうか。

2.3. 東アルメニア語の完了形とevidentiality

東アルメニア語の結果分詞-ac は、コピュラ動詞と共起することがあるが、用いられる動詞に制限があるため、パラダイムとして認めるかどうかには諸説あり、否定形に関しても他の活用形と異なる点があることは既述の通りである。また、結果分詞とコピュラ動詞の組み合わせさせた構文は、完了相というよりは結果(状態)相を表す (cf. Gevorkian 2000, Sakayan 2007)。

- (59) a. hognac em "I am tired"
get-tired-RES.PRT am
b. kaɾuc'vac ē "it is built"
build-PASS-RES.PRT is
- (60) a. nstac em "I am sitting"
sit-RES.PRT am
b. nstum em "I am sitting down" / "I sit down"
sit-PRS.PRT am

例(60)a.の結果構文は、座るという動作を行なった後で今座っている状態にあることを意味し、b.の現在形は、座る動作を今行なっている最中であるか、習慣的または繰り返し座る動作を行なっていることを意味する。

東アルメニア語でいわゆる完了を表すのは完了分詞-el を伴った活用形である。以下の例が示すように、東アルメニア語の現在完了は、西アルメニア語の現在完了Ⅰ (-ac 分詞)と同じく、完了用法として過去に終結した出来事で現在にも結びつきがあることを伝える (cf. Avetisyan 2008, Gevorkian 2000, Kozinceva 1995, Kozintseva 2000, Sakayan 2007)。

- (61) a. Jyunə ekel ē u çackel amen inč'.
snow-DEF come-PRF.PRT is and cover-PRF.PRT every thing
"The snow has fallen and has covered everything." (I am witnessing it)
b. Sedan gnac'el ē Moskva.
Seda-DEF go-PRF.PRT is Moscow
"Seda has left for Moscow." (she is now in Moscow, not here)

また、英語の現在完了形と同じように「経験」(過去の不特定の時に起こった出来事)の用法もある (cf. Kozinceva 1995, Kozintseva 2000, Sakayan 2007)。

- (62) a. Nrank' erbek' č'en ayc'elel Erevan. "They have never visited Yerevan."
they never NEG-are-3PL visit-PRF.PRT Yerevan

- b. Sedan ełel ē Moskvayum. "Seda has been to Moscow."
 Seda-DEF be-PRF.PRT Moscow-LOC

ただし、英語と異なり、過去に始まり、現在も継続している出来事について、アルメニア語では現在形を用いる (Bardakjian & Vaux 1999, Gevorkian 2000) ^{*71}。

- (63) Na aprum ē Erevanum 1990 t'vic'. "She has lived in Yerevan since 1990."
 she live-PRS.PRT is Yerevan-LOC 1990 date-ABL

同じく過去の出来事を表すという点で現在完了と類似しているのがアオリスト (単純過去) である。その用法は、西アルメニア語のアオリストと同じで、終結した過去の出来事を表す (cf. Gevorkian 2000, Sakayan 2007) ^{*72}。

- (64) a. Bolor ənkernerđ ekel en k'ez tesnelu. [現在完了]
 all friend-PL-2 come-PRF.PRT are-3PL you.SG-ACC meet-INF-DAT
 "All your friends have come to see you." (They are still here)
 b. Bolor ənkernerđ ekan k'ez tesnelu. [アオリスト]
 all friend-PL-2 come-AOR-3PL you.SG-ACC meet-INF-DAT
 "All your friends came to see you." (No indication whether they are still here)
 ※西アルメニア語の例(57)と比較

また、西アルメニア同様、現在完了が一般の遠い過去も表すのに対して、アオリストは直近の過去を指し、「今しがた」や「昨日」等の副詞と共に起しやすい (cf. Kozintseva 2000, Sakayan 2007; Eggenstein-Harutunian 2008³)。

- (65) a. Ays girk'ə kardac'el es? [現在完了]
 this book-DEF read-PRF.PRT are-2SG "Have you (ever) read this book?"
 b. Tariner aṛaj em kardac'el. [現在完了]
 year-PL before am read-PRF.PRT "I [have] read it years ago."
 c. Ere kardac'i. [アオリスト]
 yesterday read-AOR-1SG "I read it yesterday."
 ※西アルメニア語の例(58)と比較

通常、アオリストは、ある特定の時間に起こった単発の出来事を表し、くり返された出来事には用いられない (Avetisyan 2008, Gevorkian 2000, Kozintseva 2000)。それゆえ、「その時」や「5時に」等の副詞と共に起するが、「かつて」や「ある時」等とは馴染まず、後者の副詞は完了形とともに現れやすい (Kozintseva 2000)。

このように、完了とアオリストはアスペクトの点で異なるが、さらに、両者

*71 西アルメニア語でも同じである (Bardakjian & Thomson 1977)。

*72 過去において継続中・進行中であつた出来事は、アオリストではなく、未完了過去によって表される。

は別の側面でも対立する。Gevorkian(2000)は、アオリストは特に話者自身が関与した行為や目撃した行為を表す際に使用されると述べ、同じく、Sakayan(2007)も、アオリストは"*witness' tense*"であり、話者が当該の行為を目撃したか、絶対的な確信を持って発言できる時のみに用いられると強調している。一方、東アルメニア語の完了形は、西アルメニア語の完了Ⅱと同じように *evidentiality* の概念を表すことがある。ただし、当該形式は、すでに述べた通り、通常の完了の機能も備えている。いわば、東アルメニア語の完了(-el)は、西アルメニア語の完了Ⅰ(-ac; 完了機能)と完了Ⅱ(-er; *evidentiality* 機能)の両方を兼ねている。つまり、西アルメニア語では、*evidentiality* を示す形式(-er)が通常の完了を表す活用形(-ac)と異なるという点で、*evidentiality* が形態統語的に独立したカテゴリーとして存在している (cf. Donabédian 2001)。しかし、東アルメニア語の完了は、*evidentiality* のために用意された、それ専用の活用形ではない。Aikhenvald(2004)は、東アルメニア語の完了のように、ある文法カテゴリーが副次的に *evidential* に相当する機能を担っている場合を *evidential strategy* と呼ぶ。Guentchéva(1996)の書名になっている *énonciation médiatisée* もこれに相当し、文法化された *evidential*、つまり、形式的に特定化された専用の標識である *médiatif* と区別される (cf. Donabédian 2001)。厳密に言えば、東アルメニア語の完了は *evidential strategy* であり、*evidentiality* を表す形式とは言えないが、本稿では、(特にその区別が重要である場合を除き) 東アルメニア語の完了についても「*evidentiality* を示す」等の言い回しを用いることにする。

東アルメニア語の完了は、陳述内容が話者によって目撃されていない (*unwitnessed*) 出来事であることを示唆する *evidentiality* として使われる (cf. Avetisyan 2008, Gevorkian 2000, Hagopian 2005, Kozinceva 1995, Kozintseva 1996,2000, Sakayan 2007, Tioyan et al. 2007)。ただし、当該形式は完了の機能が主であり、その場合は、直に目撃した(*witnessed*)出来事も伝える (Kozintseva 1996,2000) ので、*evidentiality* の用法は、(厳密には *evidential strategy* であることから) その形式が表すことができる (文脈的な) 意味の一つであると捉えられる (Donabédian 2001, Kozintseva 2000)。

- (66) In many languages, perfects, expressing past events with present relevance, tend towards indirective readings, without being stable evidentials. They may acquire additional secondary evidential meanings through pragmatic inference and use them for evidential strategies. For example, Persian *kærdæ-æst* 'has done' and Eastern Armenian *gnac-el ē* 'has gone' are ambiguous with respect to indirectivity. (Johanson 2006a)

完了に二つの形式をもつ西アルメニア語と異なり、東アルメニア語では、一つの形式が完了と *evidentiality* の二役を演じるため、その二つの役割 (意味) は排他的ではなく、文脈がなければ、どちらでも解釈可能である (Kozintseva

2000)。東アルメニア語の完了が *evidentiality* を示す場合は、西アルメニア語の完了 II と同じような意味用法を持つ。以下の例では、話者自身が直接目撃した出来事ではなく、他者から得た情報として提示する「伝聞」を表す。

- (67) a. Lsec'ir? Karinen amusnac'el ē.
 hear-AOR-2SG Karine-DEF marry-PRF.PRT is
"Have you heard? Karine got married. (So they say.)"
- b. Əst mamuli tyalneri, gorcadulin masnake'el ē 20 milion mard.
 according-to press-GEN datum-PL-DAT strike-DAT-DEF participate-PRF.PRT is
 20 million man
"According to the newspaper, 20 million people have taken part in the strike."

例(67)b.では、情報源を示す表現「新聞（によると）」が追加されており、伝聞としての機能が明確にされている。

起こったであろう出来事を「推論」によって導き出したことを示すためにも用いられる。

- (68) a. Anjrev ē ekel, p'oloc'ə t'ac' ē. *"It has rained, (because) the street is wet."*
 rain is come-PRF.PRT street-DEF wet is
- b. Ašotn ur ē? — Dproc' ē gnac'el.
 Ashot-DEF where is — school is go-PRF.PRT
"Where is Ashot?" — "He has gone to school. (I believe)"

予期していなかった出来事を目撃して、驚きを呈する「感嘆」の用法もある。

- (69) Aha t'e mecac'el es! *"How you have grown up!"*
 behold! grow-PRF.PRT are-2SG

また、東アルメニア語の現在完了も、主語が一人称の場合、話者が無意識の中で行った非意図的・不可抗力な行為、夢の中の行為等を表すことがある (Kozintseva 2000)。

- (70) Iren (ibrev t'e) tesel em, bayc' č'em barevel.
 him allegedly see-PRF.PRT am but NEG-am greet-PRF.PRT
"I have (allegedly) seen him, but have not greeted him."

さらに、東アルメニア語の現在完了は《間接形》の機能を持つので、伝説や昔話が完了形で表現される (Avetisyan 2008, Dum-Tragut 2009, Gevorkian 2000, Kozintseva 2000)。

- (71) a. Hayeren tarerə stelcvel en 405 t'vakanin.
 Armenian letter-PL-DEF create-PASS-PRF.PRT are-3PL 405 date-DAT-DEF
"The Armenian letters were created in 405."

- b. Hayerə k'ristoneut'yunə əndunel en 301 t'vakanin.
 Armenian-PL-DEF Christianity-DEF adopt-PRF.PRT are-3PL 301 date-DAT-DEF
"Armenians adopted Christianity in 301."

西アルメニア語では、evidentiality の機能を担う完了Ⅱと対立する活用形として、完了Ⅰとアオリストがあった。東アルメニア語では、一つの完了形しか存在しないため、evidentiality の機能を有するそれと対立するのはアオリストである。現在完了もアオリストも evidentiality に関して対立するのは、過去の事象についてのみである (Kozintseva 2000)。《間接形》の現在完了に対して、アオリストが《直接形》として、過去に終結した行為^{*73}、特に、話者自身に関与した行為、目撃した行為、絶対的な確信を表すとされる (Avetisyan 2008, Dum-Tragut 2009, Gevorkian 2000, Kozintseva 2000, Sakayan 2007)。

このように、現代アルメニア語の完了形には、evidentiality としての用法がある。西アルメニア語では、二種類ある完了形のうち、evidentiality は完了Ⅱのみが担うのに対して、完了形が一つしかない東アルメニア語では、それが完了の用法とともに evidentiality の用法も兼ね備えている。東西アルメニア語で共通しているのは、evidentiality を示す形式が、その機能専用の文法形式ではなく、完了をその根源とする点^{*74}、そして、結果分詞-ac ではなく、起源を同じくする完了分詞-el(東)/-er(西)を有するほうである点である。

3. おわりに

本稿では、現代アルメニア語の言語特徴を地域的な観点から考察した。アルメニア文字の創作においては、グルジア文字同様、ギリシア語が（隠れた）モデルになっていることを見た。音韻・音声の面では、アルタイ系言語やトルコ語と共通する特徴があることを指摘した。東アルメニア語の閉鎖音・破擦音が古典アルメニア語と同じ三項対立である点は、隣接するグルジア語と共通しているが、他方、西アルメニア語では二項対立に縮小しており、トルコ語等からの影響の可能性を示唆した。Vaux(2002)は、現代標準アルメニア語だけでなく、方言においても、バルカン言語連合に特有とされる特徴の多くが観察され、その点ではアルメニア語とトルコ語もその一員だと主張することもできると論じている。本稿でも、そのようなバルカン的特徴があることを確認するとともに、現代アルメニア語が膠着的であることを様々な例を挙げながら考察した。

*73 終結した出来事でないときは、未完了過去が用いられる (cf. Kozintseva 2000)

*74 cf. C'est curieux que le parfait de l'arménien moderne n'ait rien du sens particulier du parfait géorgien, lorsque cette nuance de sens se retrouve exactement dans les formes turques en *-miş*. (Vogt 1945)

Seropian(1980)は、現代(西)アルメニア語の膠着的特性について、トルコ語の影響による構造変化というより、元来の印欧祖語の特性がトルコ語と類似している点があったため、言語接触によりその特性が強く維持されたと考えるのが妥当だと述べている。Donabédian-Demopoulos & Ouzounian(2008)は、古代のウラルトゥ語(Urartian)がアルメニア語の基層となり、トルコ語との類型的特性の共有を容易にしたのではないかと論じている^{*75}。

(72)	古典ア	現代東ア	現代西ア	トルコ	ウラルトゥ
文法的性なし	+	+	+	+	+
AN, 一致なし	+/-	+	+	+	(+)/-
膠着性	(+)/-	+/(+)	+	+	+/-
SOV と後置詞	-	+/(+)	+	+	+/-

本稿では、東アルメニア語と西アルメニア語の代名詞や名詞の様々な形態を考察しながら、前者よりも後者のアルメニア語のほうがトルコ語に近い形態構成やパラダイムを発達させており、また、膠着性が一層進んでいることを明らかにした。

アルメニア語の完了形が *evidentiality* の用法を持つに至った原因について、Kozintseva(2000)は、内在的な要因に加え、言語接触による外部からの影響もあると論じている。(引用中の下線・太字は本稿執筆者による)

(73) The shift towards the evidential use of Present Perfect was probably caused by different factors acting in the same direction.

1. The structural factors:

- the inherent tendency of the Perfect to acquire the perfective meaning
- the ability of the Past Participle to combine with different auxiliary verbs, and its two-fold action/state meaning
- the existence of different forms used in narration: aorist and imperfect

2. The contextual factors:

- if narrative text represents a succession of the same forms, then the identical auxiliary forms may be easily omitted

3. The areal factor, i.e. contact with Iranian and Turkic languages

Aikhenvald(2004)は、*evidentiality* の発達（と消失）は言語接触によって生じることが多く、いくつかの言語圏の共有特性になっていると指摘する。バルカン半島からコーカサスにかけての地域もその一つである (cf. Chirikba 2003, Donabédian 2001, Tomić 2004, 2006)。(引用中の下線・太字は本稿執筆者による)

*75 Dum-Tragut(2002)も参照。

- (74) The extended Euro-Asian area, including the Balkan languages (except for Modern Greek), Asia Minor and, from there, a broad strip going to the Far East over the Caucasus, Southern Asia, the Volga district, and Southern Siberia; in the linguistic literature this area is usually called the "**Great Evidential Belt**" and considered to be the most significant geographical locality of evidentiality, both with respect to the size of the territory and the number of languages and their genetic diversity (the **Great Evidential Belt** includes Southern Slavic, Albanian, Iranian, Indo-Arian, **Armenian**, Kartvelian, Abchso-Adygei, Nachsko-Daghestan, Turkish, Finno-Ugric, and some other languages). (Plungian 2010)

当該の地域における evidentiality の広がり背景には、チュルク系言語の存在があることは、多くの先行研究が主張するところである (Aikhenvald 2004, Chirikba 2003, Friedman 2000, Johanson 2000,2003,2006ab 等)。アルメニア語の完了が有する間接形としての evidentiality についても、チュルク系言語やイラン系言語との言語接触が関わっていることが指摘されている。

- (75) a. The development of evidentiality in Armenian can be partly explained as a result of contacts with both Iranian languages and Turkic languages. (Aikhenvald 2004)
- b. The use of the East Armenian perfect to express evidential meanings corresponding to those of the Georgian perfect may be because of contacts with Turkic and Iranian. Western Armenian, formerly spoken in Eastern Turkey and thus a contact language of Turkish, has a distinct evidential particle *eyer* developed from the inferential participle of the verb 'to be'. (Johanson 2006b)^{*76}

本稿でも、地域的特徴として、東西の現代アルメニア語が完了形による evidentiality の表現手段を有していることを詳しく考察したが、一種類の完了しか持たない東アルメニア語に対して、アナトリア方言を基盤とする西アルメニア語は、トルコ語の動詞活用-DI (直接的) と -mİş (間接的) に対応するような二種類の完了形を発達させ、その一方の形式にのみに evidentiality の機能を担わせている点は、チュルク系言語からの影響が東アルメニア語よりも強くあったことを窺わせる。

*76 引用中の "inferential participle" とは、西アルメニア語の完了 II で使われる完了分詞 (-er) のことである。

＜補遺＞アルメニア文字一覧

東西で異なる場合は、「/」の左に東アルメニア語，右に西アルメニア語を記す。転字：H-M=Hübschmann-Meillet（に準拠した）方式，LC=Library of Congress（米国議会図書館）方式。cf. Sanjian(1996), 岸田(2001)

No.	大文字	小文字	音価	転字		書体例			
				H-M	LC	筆記体			
1.	Ա	ա	[a]	a	a	Ա	ա	Ա	ա
2.	Բ	բ	[b]/[p ^h]	b	b/p	Բ	բ	Բ	բ
3.	Գ	գ	[g]/[k ^h]	g	g/k	Գ	գ	Գ	գ
4.	Դ	դ	[d]/[t ^h]	d	d/t	Դ	դ	Դ	դ
5.	Ե	ե	[ɛ, jɛ]	e	e(,y)	Ե	ե	Ե	ե
6.	Զ	զ	[z]	z	z	Զ	զ	Զ	զ
7.	Է	է	[ɛ]	ē	ē	Է	է	Է	է
8.	Ը	ը	[ə]	ə	ě	Ը	ը	Ը	ը
9.	Թ	թ	[t ^h]	t ^ʰ	t	Թ	թ	Թ	թ
10.	Ճ	ճ	[ʒ]	ž	zh	Ճ	ճ	Ճ	ճ
11.	Ի	ի	[i]	i	i	Ի	ի	Ի	ի
12.	Լ	լ	[l]	l	l	Լ	լ	Լ	լ
13.	Խ	խ	[χ]	x	kh	Խ	խ	Խ	խ
14.	Վ	վ	[ts]/[dz]	c	ts/dz	Վ	վ	Վ	վ
15.	Կ	կ	[k]/[g]	k	k/g	Կ	կ	Կ	կ
16.	Հ	հ	[h]	h	h	Հ	հ	Հ	հ
17.	Ջ	ձ	[dz]/[ts ^h]	j	dz/ts	Ջ	ձ	Ջ	ձ
18.	Ղ	ղ	[ʁ]	ł	gh	Ղ	ղ	Ղ	ղ
19.	Ճ	ճ	[ʃ]/[dʒ]	č	ch/j	Ճ	ճ	Ճ	ճ
20.	Մ	մ	[m]	m	m	Մ	մ	Մ	մ
21.	Թ	թ	[j]/[j, h]	y	y/y,h	Թ	թ	Թ	թ
22.	Ն	ն	[n]	n	n	Ն	ն	Ն	ն
23.	Շ	շ	[ʃ]	š	sh	Շ	շ	Շ	շ
24.	Ո	ո	[ɔ, vɔ]	o	o	Ո	ո	Ո	ո
25.	Չ	չ	[tʃ ^h]	č ^ʰ	ch ^ʰ	Չ	չ	Չ	չ
26.	Պ	պ	[p]/[b]	p	p/b	Պ	պ	Պ	պ
27.	Ջ	ձ	[dʒ]/[tʃ ^h]	j	j/ch	Ջ	ձ	Ջ	ձ
28.	Բ	բ	[r]	ř	ř	Բ	բ	Բ	բ
29.	Ս	ս	[s]	s	s	Ս	ս	Ս	ս
30.	Վ	վ	[v]	v	v	Վ	վ	Վ	վ
31.	Տ	տ	[t]/[d]	t	t/d	Տ	տ	Տ	տ
32.	Ր	ր	[r]	r	r	Ր	ր	Ր	ր
33.	Յ	յ	[ts ^h]	c ^ʰ	ts ^ʰ	Յ	յ	Յ	յ
-/34w.	Ի	ւ	-/[v, u]	-/w	-/w	Ի	ւ	Ի	ւ
34e.	Ու	ու	[u]	u	u	Ու	ու	Ու	ու
35.	Փ	փ	[p ^h]	p ^ʰ	p ^ʰ	Փ	փ	Փ	փ
36.	Ք	ք	[k ^h]	k ^ʰ	k ^ʰ	Ք	ք	Ք	ք
37e.	Եվ	և	[ɛv, jɛv]	ev	ev	Եվ	և	Եվ	և
38e/37w.	Օ	օ	[ɔ]	ō	ō	Օ	օ	Օ	օ
39e/38w.	Ֆ	ֆ	[f]	f	f	Ֆ	ֆ	Ֆ	ֆ

※最後の二文字 **օ**<ō>と **ֆ**<f>は、メスロプによる創作ではなく、前者は **աւ**<aw> が単母音化したものを、そして、後者は外来語を表記する目的で 12 世紀頃導入された。

※ 34e の **ու**<u>([u])は、西アルメニア語（・古典アルメニア語）では 24 の **ո**<o> と 34w の **ւ**<w>の二重字(digraph)=<ow>([u]か[v]；(3)を参照)であるが、東アルメニア語では、正書法改革で独立した一つの文字として採用され、代わりに **ւ**<w>が廃止された。37e の **և**<ev>も、5 の **ե**<e>と **ւ**<w>の合字(ligature)であるが、東アルメニア語では独立した一つの文字となった（小文字のみ）。そのため、東アルメニア語と西アルメニア語（・古典アルメニア語）とでは、当該の文字を含む語が辞書の中で見出しとして掲載される順（場所）が異なる。例：**դող** "shiver; tire", **դրամ** "money; Armenian currency dram(Դ)", **դուռ** "door", **դև/դեւ** "devil"：

東：... **դող** <doł> **դրամ** <dram> **դուռ** <duř> **դև** <dev> ...

西：... **դեւ** <dew> **դող** <doł> **դուռ** <dowř> **դրամ** <dram> ...

* 西アルメニア語で **դ**<d>の発音は[tʰ]

語が全て大文字で書かれる時は、**ՈՒ**<U>(←<OW>), **ԵՎ**<EV>と表記される。

※アルメニア語の句読点

：（終止符）文末に付く。欧米語のピリオドに相当

⁂（疑問符）疑問の対象となる語のアクセント母音に付く。文末は終止符

，（小休止符）欧米語のコマに相当

・（休止符）欧米語のセミコロンやコロンに相当

′（強調符）命令等で強意を表す際、対象となる語のアクセント母音に付く

ゝ（感嘆符）間投詞や感嘆の対象となる語のアクセント母音に付く

`（but）繰り返し語句の省略，同格的用法等で使用される

« »（引用符）

’（省略符）仏語の élision のように、母音が省略されていることを示す（西アルメニア語，伝統的正書法）

Ներեցե՛ք, պարոն։ Անգլերեն խոսո՞ւմ եք։

Nerec'ék', paron. Angleren xosu'm ek'.

forgive-IMP.2PL sir English speak-PRS.PRT are-2PL

"Excuse me, Sir. Do you speak English?"

Դու ասացի՛ր. «Շատ ուրախ եմ»։

Դու ասացի՛ր. «Շատ ուրախ եմ»։

Du asac'ir. "Šat urax em".

you said-AOR-2SG very glad am

You said, "I am very glad."

Հաւքը թեւով կը թռչի, մարդը՝ բարեկամով:

Hawk³ t'ewov kə t'ɾč'i, mardə³ barekamov

bird-DEF wing-INST PRS fly-3SG, man-DEF friend-INST

"Birds fly with their wings, people [fly] with their friends."

* アルメニアの諺 (西アルメニア語で ; Sakayan 1994)

Է՛յ, ջան-հայրենիք, ինչքա՛ն սիրուն ես,

Է՛յ, զան-հայրենիք, ինչքա՛ն սիրուն ես,

E'y, jan-hayrenik', inč'k'a'n sirun es,

hé dear-fatherland how-much lovely are-2SG

"HÉ, my fatherland, how lovely thou art!"

* Avetik Isahakyan(1875-1957)の詩より (Sakayan 2007)

կը հասնի — կ'երթայ

kə hasni — k'ert'ay

PRS arrive-3SG — PRS³go-3SG

"s/he arrives"—"s/he goes"

չի հասնիր — չ'երթար

č'i hasnir — č'ert'ar

NEG-is arrive-NEG.PRT — NEG³go-NEG.PRT

"s/he doesn't arrive"—"s/he doesn't go"

մատիտ մը → Մատիտ մ'ունիմ: (/ Մատիտ մը ունիմ:)

matit mə

Matit m'unim.

(/ Matit mə unim.)

pencil a

pencil a'have-1SG

"a pencil"

"I have a pencil."

謝辞

本稿の執筆に際し、査読者には原稿を丁寧に見ていただき、有益なご指摘を頂戴した。深く感謝申しあげる。今回は、そのご指摘を十分に活かすことができなかった部分もあるが、今後、考察を深めていきたい。

略語

1	first person	IMPRF	imperfect
2	second person	INF	infinitive
3	third person	INST	instrumental
ABL	ablative	LOC	locative
ACC	accusative	NEG	negative
AOR	aorist	PASS	passive
DAT	dative	PL/pl.	plural
DEF	definite	PRF	perfective
EMPH	emphatic	PRS	present
ERG	ergative	PRT	participle
FUT	future	RES	resultative
GEN	genitive	SG/sg.	singular
IMP	imperative		

参考文献

Abrahamyan, S. G., N. A. Parnasyan & H. A. Ohanyan (1974) *Žamanakakic' hayoc' lezu, H.2, Jevabanut'yun*. [Modern Armenian, vol.2, morphology] Erevan: Haykakan SSH

- Gitut'yunneri Akademiayi Hratarakč'ut'yun.
- Abrahamyan, S. G., N. A. Pařnasyan, H. A. Ohanyan & X. G. Badikyan (1976) *Žamanakakic' hayoc' lezu, H.3, Šarahyusut'yun*. [Modern Armenian, vol.3, syntax] Erevan: Haykakan SSH Gitut'yunneri Akademiayi Hratarakč'ut'yun.
- Aikhenvald, A. Y. (2003) "Evidentiality in typological perspective," in Aikhenvald & Dixon (2003), 1-31.
- Aikhenvald, A. Y. (2004) *Evidentiality*. Oxford: Oxford University Press.
- Aikhenvald, A. Y. & R. M. W. Dixon (eds.) (2003) *Studies in Evidentiality*. Amsterdam: John Benjamins.
- Ajello, R. (1997) "Armenian," in A. G. Ramat & P. Ramat (eds.) *The Indo-European Languages*, 197-227. London: Routledge.
- Aksu-Koç, A. A. & D. I. Slobin (1986) "A Psychological Account of the Development and Use of Evidentials in Turkish," in Chafe & Nichols (1986), 159-167.
- Ałayan, Ė. B. (1976) *Ardi hayeren bac'atrankan bařaran*. 2 vols. [An Explanatory Dictionary of Modern Armenian] Erevan: Hayastan.
- Andonian, H. (1999) *Beginner's Armenian*. New York: Hippocrene Books. [西アルメニア語]
- Anyadi, S. & A. Tamrazian (1993) "Wh-movement in Armenian and Ruhr German," in *UCL Working Papers in Linguistics* 5, 1-22.
- [Arutyunyan & Bure] Арутюнян, Г. С., К. С. Бурэ. (2008) *Армянский язык для самостоятельного изучения*. Москва: Толмач. [東アルメニア語]
- Avetisyan, A. S. (2008) *Eastern Armenian: comprehensive self-study language course*. Yerevan: A. S. Avetisyan.
- Avetisyan, H. S. (2007) *Arvelahayereni ev arevmtahayereni zugadrakan k'erakanut'yun*. [A Contrastive Grammar of Eastern and Western Armenian] Erevan: Erevani Hamalsarani Hratarakč'ut'yun.
- Barchian, A. (2001-2002) "Doit-on considérer la différence entre le passé simple et passé composé comme une différence aspectuelle?" *Slovo* 26-27, 299-308.
- Bardakjian, K. B. & R. W. Thomson (1977) *A Textbook of Modern Western Armenian*. Delmar: Caravan Books.
- Bardakjian, K. B. & B. Vaux (1999) *Eastern Armenian: A Textbook*. Delmar: Caravan Books.
- Boyacioglu, N. (2010) *HAY-PAY: Les Verbs de l'arménien occidental*. Paris: L'Asiathèque.
- Chafe, W. & J. Nichols (eds.) (1986) *Evidentiality: The Linguistic Coding of Epistemology*. Norwood: Ablex Publishing Co.
- Chirikba, V. (2003) "Evidential category and evidential strategy in Abkhaz," in Aikhenvald & Dixon (2003), 243-272.
- Clackson, J. P. T. (2004) "Classical Armenian," in R. D. Woodard (ed.) *The Cambridge Encyclopedia of the World's Ancient Languages*, 922-942. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Comrie, B. (1976) *Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Comrie, B. (1981) *The Languages of the Soviet Union*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Comrie, B. (1984) "Some Formal Properties of Focus in Modern Eastern Armenian," *Annual of Armenian Linguistics* 5, 1-21.
- Connolly, M. J. (1970) "Synchronic Armenian," in A. Sebeok (ed.) *Current Trends in Linguistics*, 160-175. The Hague: Mouton.
- Der Merguerian, R. (2012) *Arménien moderne: manuel pratique, branche occidentale et branche orientale - Étude comparative*. Aix-en-Provence: Presses universitaires de Provence.
- Diewald, G. & E. Smirnova (eds.) (2010) *Linguistic Realization of Evidentiality in European*

- Languages*. Berlin: Mouton.
- Donabédian, A. (1996a) "Perfect and Mediative in Modern Western Armenian," in Sakayan (1996), 149-166.
- Donabédian, A. (1996b) "Pour une interprétation des différentes valeurs du médiatif en arménien occidental," in Guentchéva (1996), 85-108.
- Donabédian, A. (2001) "Towards a semasiological account of evidentials: An enunciative approach of -er in Modern Western Armenian," *Journal of Pragmatics* 33, 421-442.
- Donabédian-Demopoulos, A. & A. Ouzounian (2008) "Diachronic and dialectological variations of verb morphology in Armenian: internal and/or contact-induced changes?", 13th IMM, Vienna.
- Dum-Tragut, J. (2002) *Word order correlation and word order change: an "applied-typological" study on literary Armenian varieties*. München: LINCOM EUROPA.
- Dum-Tragut, J. (2009) *Armenian: Modern Eastern Armenian*. Amsterdam: John Benjamins.
- Eggenstein-Harutunian, M. (2008³) *Lehrbuch der armenischen Sprache*. Hamburg: Helmut Buske Verlag. [東アルメニア語]
- Eggenstein-Harutunian, M. (2011) *Wörterbuch Armenisch-Deutsch*. Hamburg: Helmut Buske Verlag. [東アルメニア語]
- Fairbanks, G. H. & E. W. Stevick. (1989) *Spoken East Armenian*. New York: Spoken Language Services, Inc. [伝統的正書法が使われている]
- Feydit, F. (1969²) *Manuel de langue arménienne (Arménien occidental moderne)*. Paris: Editions Klincksieck.
- Friedman, V. A. (1979) "Toward a Typology of Status: Georgian and Other Non-Slavic Languages of the Soviet Union," in P.R. Clyne et al (eds.)(1979), *The Elements*, 339-350. Chicago: Chicago Linguistic Society.
- Friedman, V. A. (2000) "Confirmative/nonconfirmative in Balkan Slavic, Balkan Romance, and Albanian with additional observations on Turkish, Romani, Georgian, and Lak," in Johanson & Utas (2000), 329-366.
- [Gamkrelidze] Гамкрелидзе, Т. (1989) *Алфавитное письмо и древнегрузинская письменность / ceris anbanuri sist'ema da zveli k'art'uli damcerloba*. Тбилиси: Издательство тбилисского университета. [Gamkrelidze, T. V. (1994) *Alphabetic Writing and the Old Georgian Script* (Caravan Books, Delmar, N.Y.)]
- [Gamkrelidze & Ivanov] Гамкрелидзе, Т. В. & В. В. Иванов (1984) *Индоевропейский язык и индоевропейцы*. Тбилиси: Издательство тбилисского университета.
- [Garibyan & Garibyan] Гарибян, А. С. & Дж. А. Гарибян (1980) *Краткий курс армянского языка*. Ереван: Луйс.
- Gevorgyan-Ninness, S. (2008) "Epistemic modality and aspect contingency in Armenian, Russian, and German," in W. Abraham & E. Leiss (eds.) *Modality-aspect interfaces: implications and typological solution*, 97-115. Amsterdam: John Benjamins.
- Gevorkian, A. V. (2000) *East Armenian Course*. Yerevan: Adana.
- Göksel, A. & C. Kerslake (2005) *Turkish: A Comprehensive Grammar*. London: Routledge.
- Guentchéva, Z. (ed.) (1996) *L'Énonciation médiatisée*. Paris: Éditions Peeters.
- Guentchéva, Z. & J. Landaburu (eds.) (2007) *L'Énonciation médiatisée II*. Paris: Éditions Peeters.
- Gulian, K. H. (1990) *Elementary Modern Armenian Grammar*. New York: Hippocrene Books. [西アルメニア語]
- Hagège, C. (2001-2002) "Sur quelques particularités de l'arménien et sur leur contribution à la typologie linguistique," *Slovo* 26-27, 11-22.
- Hagopian, G. (2005) *Armenian for Everyone: Western and Eastern Armenian in Parallel Lessons*. Ann Arbor: Caravan Books.
- Harris, A. C. (1981) *Georgian Syntax*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Harris, A. (1984) "Georgian," in W. S. Chisholm et al. (eds.) *Interrogativity*, 63-112. Amsterdam: John Benjamins.
- Haykakan SSH GA (ed.) (1969-1980) *Žamanakakic' hayoc' lezvi bac'atrankan bařaran*. 4 vols. [An Explanatory Dictionary of Contemporary Armenian] Erevan: Haykakan SSH Gitut'yunneri Akademiayi Hratarakč'ut'yun. (アルメニア科学アカデミー・フラチャ＝アチャリヤン記念言語研究所編)
- Hewitt, B. G. (1995) *Georgian: A structural reference grammar*. Amsterdam: John Benjamins.
- Hovsepian, L. (1996) "The typological development of the Armenian language," in Sakayan (1996), 167-176.
- Ilıcak, H. Ş. & R. Goshgarian (2006) *Kendi kendine Ermenice*. [Teach yourself Armenian] Istanbul: Ermeni Patrikliği Yayınları. [西アルメニア語]
- Jensen, H. (1959) *Altarmenische Grammatik*. Heidelberg: Carl Winter.
- Johanson, L. (2000) "Turkic indirectives," in Johanson & Uta (2000), 61-87.
- Johanson, L. (2003) "Evidentiality in Turkic," in Aikhenvald & Dixon (2003), 273-290.
- Johanson, L. (2006a) "Indirective sentence types," *Turkic Languages* 10, 73-89.
- Johanson, L. (2006b) "On the Roles of Turkic in the Caucasus Area," in Y. Matras, A. McMahon & N. Vincent (eds.) (2006) *Linguistic Areas: Convergence in Historical and Typological Perspective*, 160-181. Hampshire: Palgrave Macmillan.
- Johanson, L. & É. Á. Csátó (eds.) (1998) *The Turkic Languages*. London: Routledge.
- Johanson, L. & B. Uta (eds.) (2000) *Evidentials: Turkic, Iranian and Neighbouring Languages*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Khachatrian, A. (1996) "The Armenian sound system from typological aspect," in Sakayan (1996), 177-189.
- Kozinceva, N. A. (1988) "Resultative, Perfect and Passive in Armenian," in V. P. Nedjalkov (ed.) (1988) *Typology of Resultative Constructions*, 449-468. Amsterdam: John Benjamins.
- Kozintseva, N. (1995) *Modern Eastern Armenian*. München: LINCOM EUROPA.
- Kozintseva, N. A. (1996) "Types of perfect meaning in Modern Eastern Armenian compared with English," in Sakayan (1996), 191-204.
- Kozintseva, N. (2000) "Perfect forms as a means of expressing evidentiality in Modern Eastern Armenian," in Johanson & Uta (2000), 401-417.
- Lewis, G. (2000³) *Turkish Grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Maisak, T. & S. Tatevosov (2007) "Beyond Evidentiality and Mirativity: Evidence from Tsakhur," in Guentchéva & Landaburu (2007), 377-405.
- [Maksudyan & Kirakosyan] Максудян, Л. & М. Киракосян (1990) *Самоучитель армянского языка*. Ереван: Арег. [東アルメニア語]
- Malxaseanc', St. (1944-45) *Hayerēn bac'atrankan bařaran*. 4 vols. [An Explanatory Dictionary of Armenian] Erevan: Haykakan SSR Petakan Hratarakč'ut'iwn.
- Margaryan, A. (2000) *Hayereni holovnerə*. [Cases in Armenian] Erevan: Erevani Hamalsarani Hratarakč'ut'yun.
- [Martirosyan] Мартиросян, А. (2017) *Армянский язык - Самоучитель*. Москва: Живой язык. [東アルメニア語]
- Meillet, A. (1913) *Altarmenisches Elementarbuch*. Heidelberg: Carl Winter.
- Minassian, M. (1976) *Manuel pratique d'arménien ancien*. Paris: Librairie Klincksieck.
- Minassian, M. (1980) *Grammaire d'arménien oriental*. New York: Caravan Books.
- Movsessian, P. L. (1959) *Armenische Grammatik: West-, Ost- und Altarmenisch*. Wien: Mechitaristen-Buchdruckerei.
- Parnassian, N. A. (1983) "The Development of the Grammatical Structure of Modern Armenian," *Annual of Armenian Linguistics* 4, 33-45.

- Parnassian, N. A. (1985) "On the Formation of Ashkharhabar," *Annual of Armenian Linguistics* 6, 67-73.
- [Parnasyan & Manukyan] Парнасян, Н. А. & Ж. К. Манукян (1990) *Самоучитель армянского языка*. Ереван: Луйс. [東アルメニア語]
- Petrosyan, H. Z. (1976) *Aknarkner hayereni patmakan jevabanut'yan: hodayin karg.* [Outlines of historical morphology in Armenian: category of articles] Erevan: Erevani Hamalsarani Hratarakč'ut'yun.
- Plungian, V. (2010) "Types of verbal evidentiality marking: an overview," in Diewald & Smirnova (2010), 15-58.
- Sakayan, D. (1994) *Armenian Proverbs*. Delmar: Caravan Books.
- Sakayan, D. (ed.) (1996) *Proceedings of the Fifth International Conference on Armenian Linguistics*. Delmar: Caravan Books.
- Sakayan, D. (2000) *Modern Western Armenian*. Montreal: Arod Books.
- Sakayan, D. (2007) *Eastern Armenian*. Yerevan: Yerevan State University Press.
- Sakayan, D. (2012) *Western Armenian*. Yerevan: Yerevan State University Press.
- Samuelian, T. J. (1989a) *A Course in Modern Western Armenian: Exercises and Commentary*. New York: American National Education Committee.
- Samuelian, T. J. (1989b) *A Course in Modern Western Armenian: Dictionary and Linguistic Notes*. New York: American National Education Committee.
- Sanjian, A. K. (1996) "The Armenian Alphabet," in P. T. Daniels & W. Bright (eds.) *The World's Writing Systems*, 356-363. Oxford: Oxford University Press.
- Sargsyan, A. E. (1985) *Arevelahay ev arevmtahay grakan lezuner*. [Eastern and Western Literary Armenian Languages] Erevan: Haykakan SSH Gitut'yunneri Akademaiyi Hratarakč'ut'yun.
- Schmitt, R. (1981) *Grammatik des Klassisch-Armenischen*. Innsbruck: Institut für Sprachwissenschaft der Universität.
- Seropian, H. (1980) "Indo-European, Classical Armenian, and Modern Armenian," in K. Klar et al. (eds.) *American Indian and Indoeuropean Studies*, 469-476. The Hague: Mouton Publishers.
- Slobin, D. I. & A. A. Aksu-Koç (1982) "Tense, Aspect, and Modality in the Use of the Turkish Evidential," in P. J. Hopper (ed.) *Tense-Aspect: Between Semantics & Pragmatics*, 185-200. Amsterdam: John Benjamins.
- Suk'iasyan, A. M. (1999) *Žamanakacic' hayoc' lezu*. [Modern Armenian Language] Erevan: Erevani Hamalsarani Hratarakč'ut'yun.
- Suk'iasyan, A. M. & K'. A. Suk'iasyan (2002) *Ardi hayereni ullagran-jevakazman ba'aran*. [An Orthographic-Morphological Dictionary of Modern Armenian] Erevan: Makmilan-Armenia.
- Tamrazian, A. (1991) "Focus and Wh-Movement in Armenian," *UCL Working Papers in Linguistics* 3, 101-121.
- Thomson, R. W. (1989) *An Introduction to Classical Armenian*. New York: Caravan Books.
- [Tiouan, Grigoryan & Urutyun] Тиоян, С., О. Григорян & Р. Урутян (2007) *Самоучитель армянского языка для русскоязычных*. Ереван: Зангак-97. [東アルメニア語]
- Tomić, O. M. (ed.) (2004) *Balkan Syntax and Semantics*. Amsterdam: John Benjamins.
- Tomić, O. M. (2006) *Balkan Sprachbund Morpho-syntactic Features*. Dordrecht: Springer.
- [Tumanyan] Туманян, Э. Г. (1963) *Артикли в современном армянском языке*. Ереван: Издательство Ереванского государственного университета.
- Vaux, B. (1998) *The Phonology of Armenian*. Oxford: Clarendon Press.
- Vaux, B. (2002) "There was and there wasn't a Balkan Sprachbund," a paper presented at Association internationale des études arméniennes, Würzburg, 11 October 2002.
- Venturini, E. M. & M. Malherbe (2007) *Parlons arménien*. Paris: L'Harmattan. [東アルメニ

ア語]

- Vogt, H. (1945) "Substrat et convergence dans l'évolution linguistique: Remarques sur l'évolution et la structure de l'arménien, du géorgien, de l'ossète et du turc," *Studia Septentrionalia* 2, 213-228. [=H. Vogt (1988) *Linguistique caucasienne et arménienne*, 177-192. Oslo: Norwegian University Press]
- Willett, T. (1988) "A Cross-linguistic Survey of the Grammaticization of Evidentiality," *Studies in Language* 12-1, 51-97.
- Zorc R. D. & L. Baghdasarian (1995) *Armenian (Eastern) Newspaper and Grammar*. Kensington: Dunwoody Press.
- 亀井孝, 千野栄一, 河野六郎編 (1995) 『言語学大辞典<第6巻>【術語編】』 東京: 三省堂
- 岸田泰浩 (2001) 「アルメニア文字」 河野六郎・千野栄一・西田龍雄編『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』, 73-82. 東京: 三省堂
- 岸田泰浩 (2008) 「東アルメニア語における有声閉鎖音・破擦音を表す文字の“無声化”について—正書法改革の忘れ物—」 藤代節・庄垣内正弘編 *Dynamics in Eurasian Languages* (CSEL 14), 103-130. 神戸: 神戸市看護大学
- 佐藤信夫 (2003) 『古典アルメニア語』 東京: 国際語学社
- 佐藤信夫 (2004) 『現代(西)アルメニア語』 東京: 国際語学社
- 庄垣内正弘 (1989) 「チュルク諸語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一編(1988-1996) 『言語学大辞典』, 937-950. 東京: 三省堂
- 千種眞一 (2001) 『古典アルメニア語文法』 東京: 大学書林
- 林徹 (2013) 『トルコ語文法ハンドブック』 東京: 白水社
- 吉村貴之 (2013) 『東アルメニア語文法 I & II』(平成25年度言語研修テキスト) 東京: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

【庄垣内正弘先生のこと】

庄垣内正弘先生には、公私ともに言葉では言いつくせないほどお世話になった。先生とは研究分野が異なるため、残念ながら、個別のご指導を受ける機会はほとんどなかったが、一度 CSEL 叢書の原稿について励ましのコメントをくださった時のことは鮮明に記憶している。公式の場では冷静沈着に話をされる先生も、酒の席では笑いを交え、場を盛り上げてくださった。先生は、人前では私のことを必ず「岸田君」とお呼びになるのだが、夜の席では「岸田!」と話しかけてくださり、私にはそれがとても心地よかった。病室にお見舞いに行ったときも、言語学の話や先生ご自身の昔話などで私たちを楽しませることをお忘れになることはなかった。庄垣内先生の奥様にも大変お世話になり、親しくしていただいていたので、先生がホスピスに入院されてからも、毎週お見舞いに伺った。その度に先生は相変わらずいろいろなことをお話くださり、飽きることはなかった。不謹慎かもしれないが、毎週のお見舞いは私にとって楽しみであった。それゆえ、先生の訃報は突然のことに思え、ショックが大きかった。庄垣内先生から言語学の話をもうお聞きすることができないだけでなく、他の人の前ではお見せになることがなかった、アイスキャンディーをほおぼるお姿を再び目にすることができないのは、さみしい限りである。

庄垣内先生、本当にありがとうございました。

Some areal features of Modern Eastern and Western Armenian

Yasuhiro Kishida

KEYWORDS: Eastern Armenian, Western Armenian, areal linguistics, evidentiality

In this paper, we examine the linguistic features of the two literary varieties of Modern Armenian, Eastern and Western, from the viewpoint of areal linguistics. Natively considered an Indo-European language, the first written and standardized language, Classical Armenian or *Grabar*, had a rich inflectional morphology. Both Modern Eastern and Western Armenian, however, look more agglutinative today. Since Armenian has been bordering Caucasian, Turkic and Iranian languages, it has likely been influenced by those languages during centuries. Interestingly, Armenian uses some grammatical features similar to the Balkan Sprachbund, such as the suffixed definite article, and the periphrastic comparative and superlative expressions.

It is also probable that some of the adjacent foreign languages or dialects were more familiar to speakers of Eastern Armenian while others were more familiar to speakers of Western Armenian. Standard Eastern Armenian has three distinct series of phonemes in plosives and affricates; these sounds can be voiced, unaspirated voiceless, or aspirated voiceless similar to Georgian. In contrast, Standard Western Armenian contains two voicing characteristics, voiced and (aspirated) voiceless, similar to Turkish and Persian. Morphologically, Modern Armenian is more agglutinative than the classical *Grabar*, which is due to its proximity to neighboring agglutinative languages. Furthermore, we illustrate that Western Armenian is considered more agglutinative than Eastern Armenian by examining and comparing the morphological variations of noun declensions. Regarding syntax, Modern Armenian, in particular Eastern Armenian, moves the focused element into the preverbal position, which is a syntactic feature that is also used in Turkish and Georgian.

One linguistic feature that is widely found in the Balkan, Anatolian, and Caucasian regions is the evidentiality. Many languages spoken in the regions developed an evidential verbal form, an “indirective” as Johanson (2000) calls it, based on the original perfect tense. The Turkish indirective verbal form with *-mİş* denotes unwitnessed events, contrasting with the “directive” verbal form suffixed by *-DI*. In Eastern Armenian, the perfect tenses work as an indirective evidential, to indicate that the event was not seen by the speaker, along with their typical usage as the perfect. It is similar in Western Armenian, however this standard language has

two different forms of the perfect. The perfect that uses the participle *-er*, which is considered the same as the Eastern Armenian perfect with the participle *-el*, functions as an indirective evidential. The other perfect, with the participle *-ac*, originated from a resultative construction and is used to simply express a perfective aspect. Both of the modern Armenian languages cultivated similar usage of the perfect as an areal feature. At the same time, however, one can insist that Western Armenian was more strongly influenced by Turkic languages because it acquired the two perfect forms, consistent with the Turkish *-miş* and *-DI*. The tendency to be more agglutinative in the nominal declensions in Western Armenian than in Eastern Armenian also suggests that this is the case.